

翻訳 セバスティアノー・ティンパナーロ 『ラハマン・メソッドの創成』(1)

伊藤博明

前書き

1963年にフィレンツェの書肆フェリーチェ・レ・モニエから、イタリアの文献学者セバスティアノー・ティンパナーロ (Sebastiano Timpanaro, 1923-2000) の『ラハマン・メソッドの創成』(*La genesi del metodo del Lachmann*) と題する、小ぶりの判型で150ページほどの著作が刊行された¹。しかしその反響は大きく、主としてフランスとイタリアの雑誌に25ほどの書評が掲載された²。

たとえば、古典ギリシア文学の文献学者で、のちにソルボンヌ大学、コレージュ・ド・フランスの教授を歴任することになるジャン・イリゴワン (1920-2006) は『文献学雑誌』において、次のように評している。

セバスティアノー・ティンパナーロ氏の小著はわれわれに、そのタイトルが約束している以上のものを与えている。たしかに、本書の対象は、ラハマン以前と、この偉大な文献学者の諸著作を通して、ラハマンという名前に付随している方法の緩やかな形成を正しく跡づけることである。しかし著者は、現代にまでこの研究を延長するという、喜ばしい考えを抱いていた。……

ティンパナーロ氏の著書は、その主題の厳密さにもかかわらず、容易に読み通すことができ、文献学の歴史のもっとも重要な章の一つについての決定的な寄与である。さらにその中には、古代のテキストの校訂者たちが思い巡らすために拠り所とした個人的な理念が見いだされる。³

そののち、本書は1971年に、ドイツ語による増補改訂版が、著者の監修のもとディーター・イルマーの訳によって刊行された (*Die Entstehung der Lachmannschen Methode. 2., erweiterte und überarbeitete Auflage. Autorisierte Übertragung aus dem Italienischen von Dieter Irmer, Hamburg: Buske, 1971*)。

この増補改訂版のイタリア語版はようやく、1981年に刊行された (*La genesi del metodo*

1 すでに雑誌に掲載された二つの論考をまとめたものである。Sebastiano Timpanaro, “La genesi del ‘metodo del Lachmann’,” *Studi italiani di filologia classica*, n.s. 31 (1959), pp.182-228; “La genesi del ‘metodo del Lachmann’ (continuazione e fine),” *Studi italiani di filologia classica*, n.s. 32 (1960), pp.38-63.

2 Cf. Michele Feo, “L’opera di Sebastiano Timpanaro (1923-2000),” in *Il filologo materialista. Studi per Sebastiano Timpanaro*, edito da Riccardò Di Donato, Pisa: Scuola normale superiore, Pisa, 2003, p.208.

3 Jena Irigoin, *Revue de philologie*, 38 (1964), pp.327-329. Cf. Idem, *Tradition et critique des textes grecs*, Paris : Les Belles Lettres, 1997, p.11.

del Lachmann. Nuova edizione riveduta e ampliata, Padova: Liviana Editorice, 1981)。そして、1985年に「付加」を含めた決定版が刊行された (*La genesi del metodo del Lachmann*. Nuova edizione riveduta e ampliata. Prama ristampa corretta con alcune aggiunte, Padova: Liviana Editrice, 1985)。

ティンパナーロの死後、2003年に本書は、エリオ・モンタナーリの編纂によって、彼の小論を伴って再刊された (*La genesi del metodo del Lachmann*, Con una Presentazione e una Postilla di Elio Montanari, Torino: UTET, 2003)。

そして2005年には、古代哲学の研究者、グレン・モストによって、諸版の異動も検討した、きわめて周到な英語版が刊行された (*The Genesis of Lachmann's Method*, Edited and translated by Glenn W. Most, Chicago-London: The University of Chicago Press, 2005)。

さらに、2016年に到って、フランス語版が刊行されている (*La Genèse de la méthode de Lachmann*, Traduction française par Aude Cohen-Skalli et Alain Segonds, Paris: Les Belles Lettres, 2016.)。

このフランス語版の翻訳者は、あらためてティンパナーロの『ラハマン・メソッドの創成』の今日的な意義について述べている。

この著作は、1963年の最初の出現において、根本的に革新的な意図を携えていた。すなわち、テキストの編纂のための全体的理論の考案者であった、ドイツ人カール・ラハマンをめぐって創られた、文献学的研究の真の神話の脱構築を初めておこなおうとするものだった。21世紀の文献学者にとっても、『ラハマン・メソッドの創成』において為されている分析は古びたものではない。イタリアにおいても他の土地においても、この書物は今後、古代研究者と中世研究者にとって古典となるだろう (p.xi)。

本稿では、『ラハマン・メソッドの創成』の2003年 UTET 版に依りつつ、その序文、第1章、第2章の邦訳を試みる⁴。以前に、ティンパナーロの略歴と本書の内容を紹介したことがあったので⁵、ここではそれに修正を加えて再録し、「前書き」に替えることにしたい。

ドイツの文献学者カール・コンラート・フリードリヒ・ヴィルヘルム・ラハマン (Karl Konrad Friedrich Wilhelm Lachmann, 1793-1851) はブラウンシュヴァイクに生まれ、最初ライプツィヒにおいて古典文学にいそしみ、ついでゲッティンゲンにおいて、文献学者ゲオルク・フリードリヒ・ベネッケ (Georg Friedrich Benecke, 1762-1844) の下でドイツ文学を学んだ。1816年からベルリンのギムナジウムで教え始め、ベルリン大学の私講師、ケーニヒスベルク大学の私講師を経て、1827年からベルリン大学の正教授を

⁴ 邦訳にあたっては、モストの英訳版から大きな恩恵を受けている。

⁵ 伊藤博明「ラハマン・メソッドとは何か?——セバスティアノ・ティンパナーロ『ラハマン・メソッドの創成』をめぐって」、『書物學』、第17巻、2019年、勉誠出版、21-26ページ。

務めた。

彼の業績は広範囲に及び、古典学者としては、プロペルティウス、カトゥッルス、ティブッルス、バブリウス、アウィアヌス、ルクレティウス、そして『新約聖書』の校訂版を刊行した。また、ドイツ中世の作品の編纂もおこない、『ニーベルンゲン』や『イーヴァイン』を刊行した。さらには、近代ドイツの作家レッシングの著作集を編纂している（1838-40年）。

それでは、改めて「ラハマン・メソッド」（Lachmannschen Methode）とはいったい何だったのだろうか。ラハマン自身は、テキストの校訂について組織だった方法論を残しているわけではない。したがって、ラハマン・メソッドとは、後代の研究者たちが、テキスト批判において、彼によって新しく提示され、しかも、きわめて有効であると見なした校訂上の方法なのであり、常に「いわゆる」という形容詞が暗黙裏に添えられている。

ギリシア・ラテンの古典作家について、また中世の作家についても自筆原稿は残されていないので、オリジナルのテキストを復元しようとする試みは、現存する写本群からおこなわなければならない。このテキスト批判の作業は大きく二つの過程から成る。その第一は「校合」（recensio）と呼ばれ、複数ある写本の検討から、オリジナルにもっとも近いテキストを再構成することである。第二は「校訂」（emendatio）と呼ばれ、このテキストから、さまざまな原因（写本自体の毀損、写字生の誤記、意図的な改竄など）で生じた損傷を取り除いて補填することである。

ラハマン・メソッドは、これらの過程の内でもっばら前者の「校合」に関係している。校合において重要なのは、多くの写本の中の相互関係に明らかにすることであるが、ラハマンによれば、任意の複数の写本が共通の誤記を含んでいる場合、それらは一つの親写本に拠っているとされる。この作業を現存する写本群に厳密に適用することにより、諸写本の「系図」（stemma）を作成することができ、理念的な「祖型」（archetypus）を想定することが可能となる。ラハマン・メソッドにおける系図の作成は、校合における恣意性を排除した「機械的」なものとして特徴づけられる。

この「いわゆる」ラハマン・メソッドを歴史的に、かつ批判的に丹念に解明したのが、ティンパナーロの『ラハマン・メソッドの創成』である。全体の構成と内容は以下のとおりである。

序文（Introduzione）。本書の目的が簡潔に述べられる。すなわち、ここで考究されるのは、ラハマン・メソッドのどれほどの部分が実際にラハマンに帰せられるか、そして、どれほどの部分が先行者や同時代に求められるか、またいかなる段階を経てラハマンは自らの方法を確立していったのか、という問題である。

第1章「写本に基づく校訂——人文主義者たちからベントリーまで」（L'emendatio operum dagli umanisti al Bentley）。本章では、人文主義の時代からリチャード・ベントリー（1662-1742）まで、テキストの編集者たちによる方策が概観されている。人文主義者たちはテキストの刊行にあたって、しばしば直近の写本を用い、他の写本を参照すること、あるいは自分の推測を交えることは稀だった。しかし、アンジェロ・ポリツィ

アーノ(1454-94)だけは異なり、もっとも古い写本を探求し、それから派生した写本を考慮から除外した。またルネサンスにはすでに「祖型」という概念が芽生えていた。テキスト批判の進展の中で文献学者による校訂が行き過ぎることもあり、それはベントリーの例に見られる。

第2章「18世紀における体系的校合の要請」(L'esigenza di una recensio sistematica nel secolo XVIII)。本章では、18世紀の文献学、とりわけ、新約聖書のギリシア語版の確立について論じられる。新約聖書は神学と関係する特有の問題を抱えているとともに、伝統的に受容されてきたテキスト(textus receptus)——しばしば「公認テキスト」と訳されているが正確ではない——が存在していた。それに対して、文献学者たちは世俗的なテキストと同様に、諸写本間の親子関係(ファミリー)を探求する校合の方法を発展させてきた。ティンパナーロはここで、新約聖書の校訂に携わる文献学者たちの解釈理論の成熟の過程について説明しようとしている。

第3章「ラハマンによるテキスト批判の活動の第一局面」(La prima fase dell'attività critica-testuale del Lachmann)。本章からラハマンが登場し、ここでは1816年から1829年までの彼の活動が辿られる。ラハマンが最初に取りかかったのは、プロベルティウス、カトゥッルス、ティブッルスというラテン語詩人であり、改竄を排除しながら、もっとも古い伝統を保持していると考えられる写本に基づいた校訂をおこなった。したがって、彼にとって重要だったのは校合であり、校訂や解釈は省みられない。しかし、この実践は理論の域に達することがなく、結局は、彼が選んだ少数の写本に基づくことになった。彼の実践が成功したのは、諸写本を実見することが容易だった中世のドイツ語詩の校訂においてであった。

第4章「新約聖書の編集者としてのラハマン」(Il Lachmann editore del Nuovo Testamento)。1831年から1850年にかけて、ラハマンは新約聖書の校訂に専心した。彼が採用した原則は、おおむね、ヨハン・アルブレヒト・ベンゲル(Johann Albrecht Bengel, 1687-1752)のものと合致している。すなわち、異なるファミリーに共通する異読(ヴァリアント)は採用されるべきという原則である(異読の選択における機械的基準)。さらに、「地理的基準」に則して、さまざまファミリーの写本間の合致は、より離れた地域に存在している場合により有効と見なされた。しかし、「解釈なしの校合」(recensere sine interpretatione)は、実際には一つの幻想であり、実践においてはそれ以外の証拠が考慮された。

第5章「ラハマンの同時代人たちの寄与」(Contributi di contemporanei del Lachmann)。この章では、1830年から1845年までの他の文献学者たちによる、写本の系譜的な構築の成果が紹介されている。1827年にヨハン・カスパー・フォン・オレリ(Johann Caspar von Orelli, 1787-1849)は、ルクレティウスのすべての写本について、同一の源泉に由来することを示した。一つの原型へと辿ることのできる系図を最初に描いたのはヨハン・ニコライ・マズヴィク(Johann Nicolai Madvig, 1806-86)であり、彼はそれを「祖型写本」(codex archetypus)と呼んでいる。こうして、ルクレティウスの写本の系図に関わる主要な探求は、ラハマン以前に為されていたのである。

第6章「ルクレティウスのテキストについての研究」(Gli studi sul testo di Lucrezio)。

ルクレティウスについてのテキスト批判において、ラハマンが先行者たちを凌駕していたのは、第一に、「特異な読みの排除」(eliminatio lectionum singularium)の原則を立てて、伝統の中に導入された孤立した読みを、テキストの校合から排除したことである。第二は、ルクレティウスの原型の再構成を発展させたことである(彼自身は完全な再構成をおこなうことができたと思っていた)。一方、諸写本の系図の作成において彼は混乱しており、最初は三枝の系図を想定したが、のちに二枝の系図に変更している。

第7章「ラハマンに真に帰される事柄」(Cìò che davvero appartiene al Lachmann)。ティンパナーロは、この問題に関して四つの点に絞って考察している。すなわち、1)ラテン語訳聖書のウルカタ版の拒絶と諸写本に基づいて校訂版を作成する意図、2)ルネサンスの諸写本に対する不信、3)現存している諸写本の系図的階層化、4)原型からの異読を、主観的判断に依存せず、機械的に決定させうる基準の形成。ティンパナーロによれば、これらの中で最後の点だけが、実際にラハマンに固有なものなのである。

第8章「18世紀末と19世紀におけるテキスト的・言語学的批判とそれらの危機」(Critica testuale e linguistica, e crisi di entrambe nell'ultimo Ottocento e nel Novecento)。

最後の章では文献学者としてのティンパナーロ自身の見解が披瀝されている。彼によれば、言語学とテキスト批判という二つの学問は密接に関連しており、それらの方法論も類似している。たとえば、前者はインド=ヨーロッパ語を再構成しようと、後者はある伝統に属した現存する諸写本の原型を再構成しようと努めている。19世紀以来、両学問は相互交流しているのであり、そのことに自覚的な研究者として、ティンパナーロは、アウグスト・シュライヒャー (August Schleicher, 1821-68)、ジュルジョ・パスクアリー (Giorgio Pasquali, 1889-1952)、そして自分自身を挙げている。

付論A「1817年にラハマンがおこなった機械的校合の最初の試み」(Un primo tentativo di recensio meccanica compiuto dal Lachmann nel 1817)。

付論B「失われた写本の本文を確定することについて」(Sulla determinazione del tipo di scrittura di codici perduti)。

付論C「写本の伝統の二分法的系図と混乱について」(Stemmi bipartite e perturbazioni della tradizione manoscritta)。

三つの付録の中で最も重要なのは、最後の付録Cである。ここでは、ロマンス語学者ジョゼフ・ベディエ (Joseph Bedier, 1864-1938) が20世紀の初頭に提示した「ベディエのパラドックス」への回答が試みられている。ベディエは、中世のテキストの校訂者たちが作成した系図では、二つの主要な枝に分かれているものが高い割合で生じていることを指摘し、それを彼らの真実と過誤という二分法的な観点から見ようとする傾向性に拠るものだと考えた。そして彼自身は、系図の確立と原型の想定という企てを諦めて、一冊の「最良の写本」(codex optimus)に基づいて校訂することを選んだ。ティンパナーロは二分法的系図のさまざまな事例と研究者によるさまざまな解決を検討した上で、系図のいくつかの枝は、偶然によって(混成や写字生の推測など)、あるいは写本的伝統の研究の怠慢によって、あるいは写本の階層化の誤謬によって統合された可能性を指摘している。

最後に簡単にティンパナーロの生涯と業績について触れておきたい。

ティンパナーロは、1923年にパルマで、科学史家の父セバスティアノと古典学者の母マリア・カルディーニの間に生まれた。1940年にフィレンツェ大学文学部に登録し、イタリアの20世紀最大の古典文献学者であるジョルジョ・パスクアーリに学び、彼の著作の影響はティンパナーロにとって決定的なものとなる。

エンニウスについての卒業論文を書き上げたのち、中学校で14年間にわたって教鞭を執り(1945-59)、その後、1960年から83年までは、フィレンツェの書肆「ラ・ヌオーヴァ・イタリア」(La Nuova Italia)で編集者(実際には校正者)として働いた。彼は両親の影響もあって、若い時から政治的实践家であり、「イタリア社会党」のメンバーとして活動し、『唯物論について』(*Sul materialismo*, Pisa: Nistri-Lischi, 1970, 19973)を著して、エンゲルスの思想に忠実ではないヨーロッパのマルクス主義を批判している。

しかし、ティンパナーロの最大の関心は常に文献学にあり、総計で400以上の論考をさまざまな媒体に発表している。著書としては、『ジャコモ・レオパルディの文献学』(*La filologia di Giacomo Leopardi*, Firenze: Le Monnier, 1955, 19873)、『19世紀イタリアの古典主義と啓蒙主義』(*Classicismo e illuminismo nell'Ottocento italiano*, Pisa: Nistri-Lischi, 1965, 19692)、『フロイト的言い違い——精神分析とテキスト批判』(*Il lapsus freudiano. Psicoanalisi e critica testuale*, Firenze: La Nuova Italia, 1974)があり、死後に『古代のウェルギリウス主義者と間接的伝統』(*Virgilianisti antichi e tradizione indiretta*, Firenze: Olschki, 2001)が刊行された。彼の仕事に対する学問的評価については、アカデミア・デイ・リンチェイ(イタリア)とブリティッシュ・アカデミー(イギリス)の会員だったことが雄弁に語っているだろう。

彼自身が、アカデミア・デイ・リンチェイの会員に就任する際、1989年8月22日に作成した「履歴書」(Curriculum vitae)は、フィレンツェ大学の盟友で歴史家のアントニオ・ロトンドの「ティンパナーロと20世紀後半部のフィレンツェの大学文化」に付録として収められている(Antonio Rotondò, “Sebastiano Timpanaro e la cultura universitaria fiorentina della seconda metà del Novecento,” in *Sebastiano Timpanaro e la cultura del secondo Novecento*, a cura di Enrico Ghidetti – Alessandro Pagnini, Roma: Edizioni di Storia e Letteratura, 2005, pp.85-88)。

2003年までのティンパナーロの書誌はミケーレ・フェオによって作成されている(Michele Feo, “L’opera di Sebastiano Timpanaro (1923-2000),” in *Il filologo materialista. Studi per Sebastiano Timpanaro*, edito da Riccardi Di Donato, Pisa: Scuola normale superiore, 2003, pp. 191-293)。

また、ティンパナーロの業績と思想をめぐる論集がいくつも刊行されているが、それらについては、『ラハマン・メソッドの創成』の「フランス語版への序文」を参照していただきたい(‘Intoruduction à la l’èdition française,’ p.xxxv)。

付記：本邦訳はあくまでも試作版 editio minor であり、完成版 editio major は、編文研メンバーとの「温泉合宿」を経て作成される。

セバスティアノ・ティンパナーロ

『ラハマン・メソッドの創成』

伊藤博明 訳

序文

ラハマンがテキスト批判を区分した二つの部分——「校合」(recensio)と「校訂」(emendatio)——のうち、後者については古典古代からすでに実践されていた。17世紀と18世紀において、「校訂」はいまだに有益な方法論的議論の対象であったが、それには「学問」(scienza)よりもむしろ「技法」(arte)という性格が付与されていた¹。19世紀に、校訂の方法はさらに洗練されたものになったが(とりわけ、多様な時代と多様な著作家の言語と様式についての研究が進展したことに拠っている)、しかし、けっして革命的な変化が起こったわけではない。予知的な才能についてならば、前世紀[18世紀]のきわめて優れた修正家のだれかが、トッルネブス、ベントリー、ライスケを凌駕していた、とすることはできない。

反対に、19世紀のテキスト批判の偉大な革新は、校合の学問的な基礎づけであった。しかし、いかにしてそれに到達したのだろうか。「ラハマンの方法」(il metodo del Lachmann) [以下、ラハマン・メソッド]のどれほどの部分が実際に、ラハマンに帰されるのだろうか。そして、どれほどの部分が彼の先行者や同時代人に求めるべきなのだろうか。いかなる段階を経て、ラハマンは自らの方法を仕上げていったのだろうか。以上のことはすべて、いまだに解明すべき事柄である。この点について、文献学史はほとんど何も語っていない。だが、きわめて有益な歴史的示唆が、いくつかのテキスト批判の論考に見いだされる。すなわち、クエンティン、デイン、ジャッラターノの諸論考、そしてとりわけ、パスクアーリの『テキストの伝承と批判の歴史』(*Storia della tradizione e critica del testo*)であり、この著作においては、パスクアーリの全著作におけるように、文献学と文献学史が緊密に結びつけられている²。しかしながら、ジョセフ・ベディエが

¹ 19世紀以前の推測的技法について論考の中で、最良の2つのものは、ル・クレルク (Le Clerc 1730 [1697]) の『批判技法』(*Ars critica*)とモレル (Morel 1766 = Quantin 1846: 969-1116) である。ル・クレルクの著作は、われわれが現在「校合」に割り当てている諸問題についても言及している。モレルについてはケニー『古典的テキスト』(Kenny 1974: 44-46)を見よ。ロベルテッロ『古代の書物を訂正する技法もしくは根拠についての論議』(Robortello 1557)は小著であるが、あまりにアナクロニスティックな厳格さを抑えながら、想起こす価値がある。というのは、それはこの種の論考の最初の(明らかに不完全であるが、しかし幾つかの点では先駆的な)試みだからである。この論考については Carlini 1967: 65-70; Kenney 1974: 29-36を見よ。しかし、すでに中世には(12世紀)、ローマのニコラ・マニアクティアという、テキスト批判のある理論的原理についての孤立した、しかし、いくつかの点では興味深い表明者が存在していた。彼については、以下の一連の有益な研究がある(ときおり、ある誇張に陥りがちであるが)。Peri 1967; 1977.

² Quantin 1926: 27-38 e passim; Dain 1975 (1949): 160-86; Giarratano 1951: 106-231; Pasquali 1952a (1934). パスクアーリの著作のとりわけ、「ラハマンの方法」と題された第1章を見よ。この章はすでに

1928年から望んでいたような³、より十全な探究の必要性が感じられている。私はそれを試みようとしたのであり、私に続く他の者たちが、より巧みにおこなうだろう。本書の最初の二つの章が、純粹に導入的な性格を有していることは、努めて述べておかねばならない。これらの章は、人文主義者たちから18世紀の終わりまでのテキスト批判の歴史を跡づけようとしたわけではなく、ただ、「ラハマン・メソッド」のある歴史的前提とある部分的な先駆的業績を明確にしようとするものである。

第1章 「写本に基づく校訂」——人文主義者たちからベントリーまで

人文主義者たちによる「最初の印刷本」(editio princeps)は、ほとんどの場合、入手が容易で、版組職人にとって読みやすい、直近の写本に拠っていた⁴。それゆえ、これらの刊本は概して、写字生=改竄者によって調整され、「矯正された」(abbellito)テキストを再生産したものだ。このテキストは、ある版本から別の版本へと広まっていき、「流布版」(vulgata)を構成した。

流布版を、それが満足できるものと見えないところで、改良し訂正するためには、推測することが、あるいは、より権威があると考えられた諸写本の校合を利用することができた。人文主義の時代から18世紀の終わりまで、文献学者たちはこれら二つの道に従い、ある者は一方の道を、別のある者は他方の道を選択することを表明していた。二つの傾向性については、ルーンケンが有名な『ティベリウス・ヘルムステルホイスを讃えて』(*Elogium Tiberii Hemsterhuyi*)⁵の冒頭部で描いている。「それゆえ、才知に溢れる人々の不一致のゆえに、批判家たちが実践すべき二重の方法が開始されている。一方は確固な、決して混乱していないものを訳もなく引き抜き、不確実な推測によって確実なものを砕いていた。他方は手によって写された書物からの資料だけをただひたすら集めていた」。ここでは明らかに、二つの方向性の積極的側面よりも、それらの有害な過剰さが際立たされている。ルーンケンにおいては、彼にとっての英雄であったヘルムステルホイスが、二つの要求を合致させて、真の、均整のとれた「批判技法」(ars critica)を確立した最初の者であることを(たしかに誇張された評価によってではあったが)知らしめることが重要だった。しかし、彼によってとりわけ強調されていたのは、写本の支持者たちも自らの版の恒常的な基盤として、彼らが最良と見なしていた写本を置くことが常だったわけではなく、彼らは基盤として流布版を用いていたのであり、そして、流布

論文 (Pasquali 1931) として発表されている。本書では続いて、バスクアーリの別の論考が引用されることになる。この問題については、最近、Kenny 1974 が十全に論じている。マルティン・ヘルツが書いたラハマンの伝記 (Hertz 1851) は、われわれの関心のある問題についてはほとんど触れていない。

³ Bédier 1928. 周知のように、この論考において提示されている諸理念は議論の余地が多々あるが(原著 50 ページ註 23)、しかし、ベディエが、「ラハマンの方法」の生成の研究が欠如していることを嘆いているのは正しい (1928 : 163, n.2)。

⁴ Cf. Dain 1975 (1949): 160-61. 彼は的確にも、外的な側面であれ、判型上の技術であれ、人文主義者たちの写本と初期印刷本との間の強い類似性を指摘している。Pasquali, 1952a (1934): 49-50, 78 及び第4章のほぼすべて。Kenney, 1974: 4-5; Rizzo 1973, 69-75.

⁵ Ruhnken 1875 (1789): 1.

版に満足しなかった時だけ写本に当たったということである。それゆえ、彼らの実践は「校合」(recensio)と「校訂」(emendatio)ではなく、(彼らの構想と、彼らが用いた用語法によるならば)流布版の二つの異なるタイプの校訂、すなわち、「写本に基づく校訂」(emendatio ope codicum)と、「才知に基づく校訂」(emendatio ope ingenii)あるいは「推測に基づく校訂」(emendatio ope coniecturae)だったのである⁶。

人文主義の時代において、「写本に基づく校訂」のもっとも厳密な擁護者はポリツィアーノであった⁷。第一および第二の『雑録』(*Miscellanea*)において、彼は推測に頼ることはきわめて稀である(また彼は、リウィウスについてのヴァッラの推測やクレティウスについてのマルッロの推測に比類するような、才知に溢れる推測はできなかった)。彼はほとんどの場合、「入手しえた写本」(exemplaria quae sunt in manibus)——最近の写本であれ印刷本であれ——の改竄された読みを、彼がラウレンツィアーノ図書館で発見した、あるいは別の人文主義者から教えられた「非常に古い写本」の真性な読みを対比させるだけだった。

その時まで、古代の文法家たちと比べて、実質的には何も新しいものはなかった。たとえば、構成上の構造においても、『雑録』の基本的模範を為していた、ゲリウスの『アッティカの夜』(*Noctes Atticae*)において、テキスト批判をめぐる論争はしばしば、崇敬すべき(ときおり、信じがたいほどまでに崇敬された)古代の写本に頼ることによって

6 周知のように、すでに古代の文法家たちは、“emendare”[校訂する]という言葉で、「訂正する」(correggere)という意味に用いており、したがってそこには、諸写本の——多くの場合は偶然的な——照合によって行われるような訂正が含まれている。『ラテン語宝典』(*Thesaurus Linguae Latinae*)の“emendatio”と“emendare”の項目とPascal 1918を参照。他の書誌的指示はRizzo 1973: 250, no.1にある。また、それに対応するギリシア語 διορθῶν や他の類似したもの(μεταγράφειν, μετατιθέναι など)は、同じ曖昧な意味で用いられていた。Cf. Ludwich, 1885: 93, 104-105。イタリア語学者たちの間で、テキスト批判で高名なイタリア語学者たちの間でさえ、“emendatio”の広い意味は最近まで維持されてきた。Cf. Pasquali, 1942: 226。そこでは、ミケーレ・バルビの一節が、いわば、現代的言語学的用語に翻訳されている。二つのタイプの“emendatio”の間の区別に関して、ピエル・ヴェットーリは彼の『様々な読み』(*Variae lectiones*)においてしばしば表明している(たとえばXXX 22)。「訂正箇所は……ある部分は古代の書物に基づいて、ある部分は推測に基づいて」(また、XXXVI 6など)。そこにおいて、いかなる付加語もなく、単純に“emendare”あるいは“corrigere”と言われているときには、文脈から理解されるかぎり、一般的には写本に基づく訂正を意図しており、それは彼の保守的な傾向性とも合致している。そのことについてはのちに少し触れよう。さらには、引用することが可能な15世紀から18世紀の多くの他の章句の中で、ニコラース・ヘインシウスが1661年にアムステルダムで刊行したオウィディウス著作集(ページ付けなし)への序文を参看されたい。「……ある部分は古い詩節への信頼によって、ある部分はただ才知の教えと兆しを当てにして、すでに多くの箇所において修正した」。人文主義の時代における、推測の擁護者と写本の擁護者について、方向性の最初の要約によって、いまだにSabbadini 1920: 65-60が有益である。より深いいくつかの観察は、現在はKenney 1974: 26-27および第5章に見られる。

7 この十年の間に、ポリツィアーノについての研究と、彼の未刊行作品の刊行が活気を呈している。そしてこの作業は、まだ発展段階にある。ここは十全な書誌に相応しい場所ではないので、アントニー・グラフトン(Grafton 1977a)の精彩のある総合(書誌は最新化されており、先行する人文主義者と同時代の人文主義者への豊富な言及がなされている)を勧めるに留めたい。さらに、ピサにおけるアレクサンドロ・ペローザの、第一『雑録』(*Miscellanea*)についてのセミナーを無限の感謝とともに想起することを許していただきたい。このセミナーに私は、1960年代の最初に出席するという幸運を得たのである。引き続いて、他の研究者たちの寄与について引用したい。

解決された⁸。しかし、ポリツィアーノはしばしば、より古い写本への彼の趣向を確固とするために、系譜的な特徴についての考察を加えている。すなわち、より新しい写本はより古い写本の写しなのであり、それゆえ、独立した伝統の価値を有しないのである⁹。

よりのちまで——これから見るように18世紀において、そして残念ながら現在においても——「派生的写本の除外」(eliminatio codicum descriptorum) という術語を受け入れている作用は、しばしば、文献学者の時間と労力を節約するための都合のよい方策となっている。すなわち、不十分な証拠、あるいは、一群の新しい写本をきわめて古い一冊の写本のそばに置いて単純に確認することは、より古い写本からより新しい写本群が派生したことを要請する、とあまりに容易に説得したのである。ポリツィアーノも、ときおりこのように振る舞ったのであろうか。私は本書の初版においてそのように想定したし、今も私はそれを完全に除外しようとは思わない。しかしながら、そのときにも私は、ポリツィアーノが確固とした証拠に基づいて「除外」をおこなった周知の例を引用していた。そして今は、このような場合が、全体ではないとはいえ、少なくとも大部分を占めていると見なしているリッツォ (Rizzo: 315, no.2) が正しいのであろうと、ある留保はしながらも信じるようになっていく。第一『雑録』の第25章において、ポリツィアーノは、キケロの『縁者・友人宛書簡集』(*Epistulae ad familiares*) の、製本の誤りによって一葉の乱丁が見られるラウレンツィアーナ写本 (49, 7) が、より新しいラウレンツィアーナ写本群の元本であることを示した。というのは、後者の写本群においては、書簡の順序の同じ混乱が、一葉の変動が原因とされることなく見いだされるからである¹⁰。彼の第二『雑録』によって証明されるように、彼は類似した推論によって、ヴァレリウス・フラックスの古い写本の転写を除外した¹¹。それゆえ、ポリツィアーノにおいてすでに、より古い写本への一般的な崇敬を超えて、写本の伝承についての歴史的考察の端緒が存在したのである。また彼の中には、推測は、それが必要な時には、より最近の写本において改竄が被ってきた欺瞞的な修復からではなく、われわれが辿ることができるもっとも古い伝承の段階から始めるべきであるという自覚があった。この基準

8 たとえばゲッリウス『アッティカの夜』1. 7; 1. 21. 2; 2. 3. 5; 9. 14; 12. 10. 6; 13. 21. 16; 18. 5, 11. より一般的に、諸写本のギリシアとローマの文法家たちの使用については Lehrs 1882, pp.322-349 を参照。古典古代の基準と大多数の写本の基準との間の動揺が欠くことはなかった。この問題についてのガレノスの考えについては、たとえば Brücker 1885: p.417 を参照。

9 たとえば、『雑録』第5章(「ヴァレリウス・フラックスの『アルゴナウティカ』のきわめて古い写本……それから、現存している他の写本は派生したように私には思われる」。以下の註 11 で引用する第二『雑録』の章句を参照)。第25章(すぐのちに言及する)。第41、89、93、95章。とりわけ、スタティウスの『シルヴァエ』を含んでいる初期印刷本への有名な注記を参照。「私はスタティウスの『シルヴァエ』の写本を見いだした……、それは不完全で改竄されており、(思うに) 中途半端なであるが、この一つの写本から、現存している他のすべての写本が流れ出たように思われる」(Perosa 1955: 15 と以下の註 12 を参照。ポリツィアーノが参看した写本についての議論が沸騰している問題について、ここは立ち止まるべき場所ではない)。また、アピキウスへの類似した注記を参照 (Rizzo 1973: 315 n.2)。

10 ラウレンツィアーナ写本 (49, 7) はまた、9世紀のラウレンツィアーナ写本 (49, 9) に由来している。このことにポリツィアーノは気づいていたが(同じく第25章の冒頭部を見よ)、その証明を与えるために立ち止まっていた。「そのことは多くの証拠によって説明できるが、今は省略することにしよう」。問題のすべては Kirmer 1901: 400-406 において十全に明らかにされている。

11 Poliziano 1972: 4, 6-7 (cap.2); cfr. 1: 23 e n.45; Branca 1973: 347-352.

は、ラハマンの時代になって、ようやく十全に認識されるようになった。

さらに加えて、ポリツィアーノはすでに、諸写本（少なくとももっとも古く、もっとも価値ある写本）を、偶然的ではなく、体系的に——流布版テキストに由来するすべての読みを、また、テキストの復元にとって有益であることが明らかなのは、誤っていることが確実な読みも記録して——校合する必要性を理解していた。これは彼が『農事論』（*de re rustica*）の著者たち、プリニウス、スタティウス、ペラゴニウス、テレンティウスへの追記において表明した基準である（彼の新奇な方法論は、たとえその適用の端緒は彼に先立つ人文主義者たちや、おそらくは、すでに中世の写字生たちにも欠けていなかったとしても、彼はそれを十全に、正しく自覚していたのである¹²）。この点で彼は、エルネスティとヴォルフ（原著40ページ以下を見よ）に先駆けていた。そしてすでに、校合の恒常性ではなく、偶然性を含意していた「写本に基づく校訂」という誤った概念を乗り越え始めていた。

ポリツィアーノのような保守的なテキスト批判への傾向、写字生=改竄者たちへの批判、最近の諸写本をこれまで保存されてきた「最古の写本」(*vetuistissimus*)の写しとして過小評価することは、ピエル・ヴェットーリの中に、論議と例示のより強力な支持とともに見いだされる¹³。常に、推測しようとする傾向をあまりもたないヴェットーリは、ある読みが古い諸写本によって一致して支持されているときは、とりわけ躊躇する。「私は、古い写本がすべて同じ誤りを犯していると考えることはほとんどできない」¹⁴。それは、すべての伝承に共通する改竄を説明できる、祖本の概念に明確に到達していなかったのであれば、まったく当然の躊躇であった。さらに、ヴェットーリは、徹底した保守的な信頼の告白（「私は自らの事柄への過剰な愛よりも、古い書物とともに誤ることを欲する」¹⁵）にも関わらず、彼の文献学的作業の具体的な実践においては、無批判者などではなかった。すなわち、彼の写本的伝統の擁護は、ほとんど常に、より深い解釈の、著者の文体についての優れた認識の結果である。それはヴェットーリが深く知っていた著者、キケロについてとりわけ当てはまる。また彼が刊行したギリシアのテキストにとっても、少し当てはまる——彼はときおり、たしかに過度の保守主義に陥っていたのだが¹⁶。

12 Perosa 1955: 15, 22, 26, 38, 66 によって引用された章句を見よ。

13 ここで引用することができる多くの章句の中でも、キケロの『縁者・友人宛書簡集』(*Epistulae familiares*)への彼の序文を見よ(Vettori 1586 [1558]: 69-70)。とくにヴェットーリはこう記している。「邪悪な訂正者たちは彼ら〔著作家たち〕に、時自体と初期の世紀の無知が負わせるのに劣らない傷を負わせた」。

14 Vettori 1540: 524.

15 Vettori 1571: 166. Cfr. *ibid.*, 71. 「私は本性上、他の著作家たちについて無分別に直すことにためらいがありました」。

16 『アガメムノン』の彼の校訂版については Frankel 1950: 1, 34-35 を見よ。ヴェットーリの人格一般については、これまで十全には知られてこなかったが（いくつかの示唆は Grafton 1975: 162-179 に見られる）、われわれはルチア・チェザリーニ・マルティネッリの新しい研究を待つことにしよう。ポリツィアーノの後を追って、とりわけ、「派生写本の除外」において際立っている、ヴェットーリの弟子たちと後継者たちのグループについては Grafton 1977b: 162-179 を見よ。とりわけ、ヴェットーリの前後の、『ユスティアヌス法典』については Caprioli 1969（しかし、カプリオーリの基本的な研究は16世紀にまで及んでいる）と Troje 1971 を見よ。

しかし、たとえ東の間であったとしても、校訂のための祖本の概念の使用に到着したのはエラスムスである。『格言集』(Adagia¹⁷)の中で彼は、アリストテレスの『形而上学』において引用されている格言的表現に対してある訂正を提案し¹⁸、次のように所見を述べている。「諸写本の間の一致については、たとえ控え目であっても、諸諸本を考量し、比較したところのある者にとっては、けっして驚くべきことではないように見えるだろう。というのは、一つの祖本の誤りが、ある真実の見かけとして提示されている限りは、書物という、いわば普遍的な後継者たちの中に、『子どもたちの子どもたちに、そして、次に生まれる者たちに』(καὶ παῖδας ταῖδων καὶ τοῖ μετόπισθε γένωνται¹⁹) 広まっていくだろうからである」。

この一節(本書の初版における取り扱い、リッツォ [Rizzo 1973: 316] によって訂正された解釈の凡庸な誤りのゆえに、不適切なものだった)について、少しばかり立ち止まる必要があるだろう。人文主義者たちは(古代の人々のように——たとえばキケロ『アッティクス宛書簡集』Epistulae ad Atticum, 14, 3, 1)、「祖本」(archetypum)や「祖本的写本」(codex archetypes)と用語によって、著者によって校閲され、そののちに写しによって流布することになる「公的作例」(esemplare ufficiale)を指示していた、と通例は考えられている。リッツォ (Rizzo 1973: 308-317)がおこなった、より広範囲にわたる、より深い探究が明らかにしたのは、おそらくは一般的であったこの意味に加えて、その用語は人文主義の時代に他の多くの意味を有しており、それらの中には、のちに支配的なものとなる、写本という意味が——著者から多くの世紀の後のものであれ、たまたま救出され、「公式性」や規範性を欠いているものであれ、誤謬や脱落で台無しになっているものであれ——、それに他のすべてが由来する写本という意味が見いだされる、ということである。この意味で、メルラは1472年に書いたプラウトゥスへの序文において、「祖本」のことを(「いわば」[velut]という言葉が先に置かれているので、まだいくらか隠喩的な価値が付与されているのではあるが)、プラウトゥスの喜劇の現在まで存在している写しが由来する、失われた「唯一の書」(unus liber)と呼んでいる(Rizzo 1974: 314)。そして、ポリツィアーノは、スタティウスの『シルヴァエ』(Silvae)の注釈において、この同じ用語を、彼が実際に見て、「不完全で」(medosus)「中途半端な」(deimidatus)と判断した、ボッジョ写本について用いている²⁰。「祖型」(あるいは形容詞「祖本的な」)の「ラハマン的」(lachmanniano)用法に到達するためにまだ欠け

17 Erasmus 1538: 209 (Chilias 1 cent. 6, adag. 36). 初版(パリ、1500年刊)には、この格言はまだ見いだされない。それは、N・G・ウィルソンから教示されたように、1508年のヴェネツィア版において初めて現れる。

18 『形而上学』第2巻(999b5)。“Τίς ἂν θύρας ἀμάρτοι;” すなわち「誰が扉(のような大きな標的)を打とうとして迷うだろうか」。この表現を、アフロディシアスのアレクサンドロスは次のように説明している。「それは標的を打つ射手から借用されている」。エラスムスは誤って、θύρας(扉を)を θήρας(獲物を)に訂正しようとした。Cf. Leutsch 1851: 678.

19 このような(あるいは、確実に誤って“καίτοι”という)、『格言集』の諸版を私は手にしている。ホメロスのテキスト(『イリアス』20.308)は“καὶ παῖδων ταῖδες, τοὶ κεν...”である。“παῖδας”という対格はエラスムスの文脈が要求する変化である。他の相違は、記憶による引用の誤りだろう。

20 Poliziano 1978: 16. Cf. pp.10, 13-17. 先の註6を参照。

ているのは——私が思うところでは——その用語を失われた、また一方で、原本や公式作例とは異なる原本に限定することである。ポリツィアーノ自身は何度も、ピサの、のちにフィレンツェの『ユスティニアヌス法典』の写本を祖型と、すなわち、現在まで存続し、ユスティニアヌスによって様々な都市に流布した公的作例の一つと彼が考えた写本と呼んでいる²¹。

ともかくも、われわれが引用した、エラスムスの章句の重要性は、失われた共通の作例として祖型の使用ではなく（上述したように、少なくともメルラは、言葉遣いは慎重であったが、この用語の意味においてエラスムスに先んじていたし、おそらく、エラスムスは人文主義時代に流通していた他の意味も受けいれただろう）、むしろ、「諸写本の一致」(consensu codicum)に脅えることなく（エラスムス以降であっても、先ほど見たように、ピエル・ヴェットーリは脅えたままだろう）、誤りと思われる読みを訂正する権利の積極的な主張に存している。ある伝承全体に広がる多元発生という信じがたい現象によって、同じ誤りが、相互に独立している写字生たちによって犯されることはなかった。その誤りの責任者はただ一人の写字生であり、彼に続く写字生たちはそれを繰り返したにすぎない。というのは、それは、真理 (focus) の姿をしている、巧妙に欺く誤りだったのであり、それゆえ写字生たちは訂正しようとは考えなかったからである。

エラスムスは、『格言集』からの章句において留意している特殊な例において、たしかに「古代の」祖型について考えていた。というのは、彼は、アフロディシアスのアレクサンドロスが、自分のアリストテレスの写本において、“θύρας”を誤りと推定して読んでいる事実（エラスムスは明瞭に指摘している）に当惑しなかったからである。しかし、一般的に彼は、写本の伝承全体を通して、「粗野な」改竄や、無意味な表現や、脱落が蔓延することは不可能であると考えていたように思われる。すなわち、これらについては、後続する写字生たちは気づいていただろうし、それを訂正しようとしたはずだからである。エラスムスのテキストの伝搬についての概念はあまりに反機械的であった。それは、ある伝承にだけ適用される概念であった。

16世紀の偉大なフランスの文献学者たちは、トゥルネブスから、ランバン、ダニエル、ピトターまですべてが、古代の写本を探求し、それらを自らの刊本のために利用するという必要性を感じていたが、しかしもっとも感じていたのはヨセフ・スカリゲルだった。テキストの推測家として彼は、トゥルネブスよりはるかに才能が乏しく、自由気ままで、気まぐれの覚え書きの集成には敵意をもち、すでに彼の活動の最初の期間に組織的な作業を企てており²²、個別的過去への趣向よりもはるかに歴史的精神によって鼓舞されて、

21 Rizzo 1973: p.313 e n.2 を見よ。ポリツィアーノと交流があり、彼の影響を受けた他の人文主義者たちについては Caprioli 1969: 393-404 e passim を見よ。

22 1594年のヤヌス・ドゥサへの書簡を見よ (Scaliger 1627: 52)。「われわれは両方の言語による作家たちを詳しく観察したが、彼らは異説、旧来の読み、混成、そしてこの種類の他の事柄という怪物的な子孫を生みだすことができるもので、現今の文献学者たちの野心がそれらをめぐって騒ぎ回ろうとしている。……しかし、われわれの徹夜が果実を産みだすために、われわれは著作家たち全体を解釈し、純化しようと企てた。この統一性への要求はのちに、より成熟した年令の偉大な歴史的、年代記的作業において十全に発展した」。Cf. Bernays 1855: pp.46-47.

中世の祖本（それを指示するために、「祖型」という用語を使用していないとしても）の再構成という問題に初めて取り組んだのである。彼は『カトゥルス弾劾』（*Castigationes in Catullum*）の中で、いくつかの写しの改竄に基づいて、祖型が前カロリング朝の小文字で書かれたことを確証したと信じた²³。その証明は成功したものは考えることができないが²⁴、しかしながら、その試みはきわめて興味深いものである。スカリゲルもまた、ポリツィアーノやヴェットーリの跡を追って、15世紀の改竄者たちと論争した。彼らは、文体的上の甘言者たちの敵であり、古拙なラテン語の簡潔さを愛する者としての彼を、とりわけ嫌悪した²⁵。しかしスカリゲルは、古い写本もまた、改竄で汚染されており、推測によって救済されねばならないことを理解していた。「それゆえ、黄金が試されるごとく、最近の諸版本は古い写本によって検討されねばならないように、写本もまた、判断の秤において吟味され、正されなければならない」²⁶。まったく不格好な祖本についての、それ自体では完全に正当である仮定から、彼は詩作品の数行を、とくにティブルスの場合に、それらに論理的な秩序を与えるために置き換える権限を有しているとさえ感じていた²⁷。校合することにおいて慎重であり、推測することにおいて過激であること。われわれはこの対照を、ラハマンにおいては再び見いだすだろう。

スカリゲルは、彼の先行者たちと同時代人たちから、とりわけヴェットーリから、諸写本の完全な校合の必要性を引き出して、カトゥルスの校訂版において、そして、概略を示したばかりのヴァレリウス・フラックスの校訂版において発展させた。よりのちに、マニリウスの校訂版においては、彼は気まぐれな校合の実践に戻っている²⁸。

23 Scaliger 1582 (1577): *Castigationes*, 4. 「さらに、私は、ガリアの写しがランゴバルド族の文字で書かれているのではないかと疑った。というのは、経験の浅い写字生たちによつてのちの諸写本に撒かれた誤りが、あれらの曲がりくねった表記からまさに生じたように思われるからである。そのことについてわれわれは、適切な場所において注意深く指摘するであろう」。「ランゴバルド族の文字」(*Langobarudicae literae*)とは、ここではベネヴェント派の小文字ではなく、前カロリング朝の小文字として理解しなければならない。そのことは23ページと73ページにおいて、スカリゲルが誤りをaとuとの交換に起因すると想定している事実から帰結する。「ランゴバルド族の表記においては、これらの文字の間にはいかなる相違も存在しない」(p.23)。「uとaはランゴバルド族の表記においては同一である」(p.73)。人文主義の時代における「ランゴバルド族の文字」という用語の広範な使用についてはCasamassima 1964: 566-67; Rizzo 1973: 122-23を参照。スカリゲルが重要だと見なした他の文字の交換については、原著120ページ註3を参照。

24 再度、原著120ページ註3を参照。

25 たとえば、『弾劾』(Scaliger 1582 [1577]: 105)を見よ。スカリゲルの古代風への偏愛については、オルフェウス讃歌の彼によるラテン語版とエンニウスについての有名な判断(Bernays 1855: 283で報告されている)が想起こされる。

26 Scaliger 1600 (1579)への「序文」(8)。

27 この置き換えに対してはHaupt 1875-76: 3.30-41の前に、すでにHeyne 1817 (1755): xviii-xixが抗議していた。

28 カトゥルスについてはGrafton, 1975: 158-161を、ヴァレリウス・フラックスについてはWaszink 1979: 81 e n.21を、マニリウスについてはGrafton 1975: 174-76を参照。この方法論的後退の契機が、グラフトンが指摘しているように、スカリゲルとイタリアの文献学者たちの関係の悪化に帰されるということは、私にとっては信じがたい。一方で、スカリゲルにおいて、マニリウスの校訂版の頃に、テキスト批判への趣向が弱まったことは事実である(Grafton 1975: 175. Grafton, *ibid.*, n.71が引用している書簡でフスマンが指摘している)。むしろ私は、完全な校合のために必要である不断に留意する忍耐

写本という資材についての認識は、17世紀のオランダの文献学者たち、とりわけニコラース・ヘインシウスの著作によってきわめて深化した。ヘインシウスは、周知のように、ヨーロッパ全土を旅して、膨大な数の写本を検討し、そして、現在においてもその正確さのゆえに感嘆されている、それらの校合をおこなった²⁹。そして彼は、多くのテキストについて最良の写本を指示することができた。彼は、すでにスカリゲルがおこなったように、中世の祖本について明確な概念をもっていただけでなく、また、きわめて厳密な方法を適用したわけではなかったが、クルティウス・ルフスとブルデンティウスの写本の伝承において、二つの写本のファミリーを区別することができた。とはいえ、ケニーが指摘したように、彼が自らのオウィディウスの版の基盤として、彼の父、ダニエル・ヘインシウスが1629年版のために整えたテキストを採用したという事実は、彼がいまだに、いくらか時代遅れの観点に立っていたことを示唆している³⁰。容易で優雅なオウィディウスよりも、オウィディウスのラテン語の作詩法に対する愛によって、彼はしばしば、テキストを潤色することだけを目的にして推測するようになったように、また、より新しい写本の華麗ではあるが、あまり根拠のない読みを幾度も好んで採用するようになった。のちに彼は、ペトロニウスのテキストに関しては、はるかに注意深い方法によって対処している。すなわち、彼は、多くの「異例さ」(anomalie)が改竄ではなく、著者のきわめて個人的な文体に拠っていることを理解した³¹。

しかし、ここでわれわれは、ある限定的な状況に直面している。すなわち、誰も『サテュリコン』(Satyricon)のラテン語を「キケロ化する」(ciceonianizare)意図を抱くことはできないだろう、ということである。そのラテン語(たんに「トルマルキオの饗宴」においてだけでなく)といわゆる古典的ラテン語との相違は甚だしいのである。ニコラース・ヘインシウスについて(彼の偉大さは一般的に認識されているとはいえ)これまで存在した、また、いまだに存在している論議と多様な評価は、おそらく、彼が他の者たちよりもおそらく際だって、「過渡期の人物」(personalità trapasso)であったこと、半分は言葉の厳密な意味で人文主義者、半分は新しい必要性を自覚している文献学者であったことに由来している³²。「人文主義者」としてのヘインシウスの欠陥は他のオランダ

と能力の減少のことを考えたい。それらは、テキスト批判の問題にずっと関心を持ち続けてきた研究者においてさえ弱体化するのである。

29 たとえばMunari 1950; 1957を参照。他の書誌はKenney 1974: 59n51。ケニーによって予告されたM・D・リーヴの論考はReeve 1974として刊行された。Cf. Reeve 1976。

30 Kenney 1974: pp.62-63。Grafton 1977b: 173の異論と、その返答であるKenney 1980を参照。さらに、われわれが先に註6において、オウィディウスへのヘインシウスの序文から引用した、実質的に未来ではなく、過去に向けられた形成化を見よ。

31 Cf. Blok 1949: 246, spec. 247-252.

32 このような対照はKenney: 1974: 57-63(上記の註27における返答においても繰り返されている)によって明確にされた。L. Müller 1869が与えたニコラース・ヘインシウスの特徴化は不完全なものだが、情動的に生気に満ち、鋭く、いまだに読むに値する。Block 1949は、情報量の豊かさとヘインシウスの人物像の新しい側面を明らかにした点で基本書である。しかし、『スウェーデンのクリスティーナに仕えるN・ヘインシウス』(N. Heisius in Dienst van Christian van Zweden)というタイトルは少々残念である。というのは、それは第一に、外交官としてのヘインシウスの伝記を想起させるからである(この書物はオランダ語で書かれており、それゆえ私は参看するのに苦労したが、それも完全なものではない)。

人たち、たとえばヤン・ファン・ブルークホイゼン（プロウクフシウス）において際だっている。一般的に、17世紀において、また部分的には18世紀においても、諸写本の検討は、深みよりも広さにおいて進展した。この傾向の極端な例はイエズス会士ジロラモ・ラゴマルジーニであり、彼はケケロの無数の写本と刊本から抜き出した異読の純粹で単純な蒐集者であった³³（他方、別のイタリア人のケケロ研究者、ガスパレ・ガラトーニはのちに、才知に溢れる文献学者であることを示すことになるだろう）。われわれがポリツィアーノ、エラスムス、そしてとりわけスカリゲルにおいて指摘した写本の伝承史の手掛かりは、研究の進展とともに数多くのものが明らかになりうるような例外を除いては、たいして発展しなかったのである³⁴。

諸写本を評価し（系統を再構成するわけではないが）、真性の読みを改竄された読みから区別するという偉大な能力をもっていたのは、17世紀の終わりから18世紀の最初の数十年の間を生き、きわめて才知に溢れた文献学者で、あらゆる時代を通じてもっとも才知に溢れた文献学者の一人であるリチャード・ベントリーであった。「ベントリーのことを深く知っている者は、ホラティウスの新しい校訂者が、ひとたび彼の推測の大部分を除くならば（この作業は困難なものではない）、テキストの構成に関する事柄のために、もはや彼は、自分にとってほとんど何も為すべきことをもっていないことを疑わないだろう」。このラハマンの判断は、他の一流の研究者たちによっても繰り返えされており³⁵、ベントリーの作業方法にあまりに単純化されたイメージを与えるという危険はあるとはいえ、本質的には正しいものである。彼において、諸写本の（ホラティウスの場合は「より新しい写本」の）利用と、推測的な作業が順序だてて続くのではなく、絡み合っており、多くの場合、後者が前者に優先している³⁶。しかし、ベントリーの批

ブロックの著作の主要な結論は Waszink: 72-73, 82-83 によって要約されており、それは Grafton 1977b によって共有されている。私は、ヘインシウスの重要性については——繰り返すが——疑問の余地はないが、この書物の過度に弁護的な印象を拭い去ることはできない。

33 いわゆるラゴマルジーニ写本の大部分が実際は、多くは劣悪な写本に由来する、古い印刷本であることは Nardo 1970: 147-148, 154-158 によって明らかにされた。

34 私がダンテ・ナルドから指摘された、これらの例外のひとつは、ヴィチエンツァの著名な園芸家であるジュリオ・ポンテデーラによって制定されたものである。彼は古典古代の研究に身を捧げ、ラテン語の農業に関する作家たち（カトー、ウァッロ、コルメッラ、パッラディウス）のテキストについて卓越した貢献をなした。多くの場合、流布版に対して写本の読みを擁護し、それによって、探究の糸をさらに伸ばしたので——これらの作家に関して——ポリツィアーノとピエル・ヴェットーリから称讃された。ポンテデーラの研究（とりわけ Pontedera 1740）の重要性については、ヨハン・ゴットロープ・シュナイダーが気づき、彼は『農業論集』（*Scriptores rei rusticate*）の中に、死後刊行の『書簡と見解』（*Epistulae ac dissertationes*）再版している（Schneider 1794-96; 4.2. cf. I.vii-viii）。シュナイダーを通して、彼の多くの寄与がより新しい校訂者たちによって受け入れられたが、今まで、文献学史家は彼を無視してきた。

35 Lachmann 1876: 2, 253n1 (= Lachman 1830: 820n1). Cf. Wilamowitz 1982: 78; Kenney 1974.

36 この点については、現在はより正確な Brink 1978: 1141-48, spec.1147-48 を参照。しかし、私見では（以下の註 37 を参照）、ブリックはベントリーのホラティウスについての推測を再評価しようとする点で、また——パウル・マースに倣って——ホラティウスの伝承されたテキストが広く改竄されていると主張する点で行き過ぎている。さらに、ヴィラモヴィッツが（Brink 1978: 1444 が言及しているように）ホラティウスのテキストは推測する「必要がない」と述べたというのは本当ではなく、むしろ、「ほとんど必要がない」（*vershwindend wenig*）のである（Cf. Wilamowitz 1927: 36）。この相違（おそらくはブリックの英語のテキストのイタリア語への翻訳者のせいだろう）は見過ごされるものではない。

判テクスト的行為（流布版に対する健全な不信）という側面は、彼の死後100年たって、まさにラハマンによって明らかにされたのである。ラハマンはこのことを、それがもっとも可視的になる領域、すなわち「新約聖書」の批判から出発して発見した（本稿135ページ以下を見よ）。ベントリーの同時代の、また彼にすぐ続く世代の古典文献学者たちにとって、このような側面は概して、別のより目立つ側面、すなわち非凡な、しかしときおり性急な推測的批判者（カリマコスとマニリウスの修正のことを考えれば十分だろう³⁷）によって隠されたままだった。このことについては、ベントリー自身が、きわめて有名な「われわれにとって理性と事象自体は、百の写本よりも価値がある」³⁸という言葉のように、たしかに積極的な発言によって後押ししている。あるいは、ホラティウスの序文における、おそらくさらに特徴的な一節において彼は、推測はまさに文献学者の責任を全面的に引き受けるがゆえに、伝統的な読みの受容や諸異読間の選択よりも確実な結果を与えることになるだろうと主張している³⁹。流布版や任意の写本が提供する最初の読みへの無精で無批判的な固執に対抗する、彼の議論には真実があった（Kenney, pp.72-73 を参照）。しかし、それは批判版の目的として、歴史的により蓋然性の高いテクストではなく、校訂者の趣向と精神性に従って最良と想像されたテクストを置こうとした。

私は、ミルトンの『失樂園』(*Paradise Lost*) の、恣意的な推測に満ちているベントリー一版が、よく言われているように、彼の老年期の衰退の証拠であるとか、あるいは（こちらの方は幾分の真実を含んでいるかもしれないが）彼がラテン詩とギリシア詩ほどに英詩に親しんでいなかったことの証拠であるとは信じない。私は、ブリンク（Brink: 1161-64）が提示した、幾分パラドキシカルな説が真剣な考慮に値すると信じている。ブリンクによれば、ベントリーによる、テクスト批判の領野では道を踏み外しているミ

37 カリマコスについては Pfeiffer 1976: 153; Pfeiffer 1949-53: 2. xlv-xlvi を参照（また Hemmerdinger 1977: 490-92 を見よ）。マニリウスについては Housman 1937 (1903): xvi-xix を参照。ここは、ベントリーによる、これらの著作家、また他の著作家たちへの輝かしい寄与について立ち止まる場所ではない。

38 彼（Bentley 1711）が刊行した、ホラティウスの『カルミナ』（3. 27. 15）への註において（他の文献学者たちによる類似した言明については Kenney: 42, n.2, 99 を参照）。実際には、ベントリーはこれらの言葉にこう付け加えている。「とりわけ、古いヴァティカンの写本の評決が加わって」。しかし、最良の伝統における“vetat”に対して、彼が支持した“vetat”は、いずれにせよ誤りである。

39 同書の序文（Bentley 1711: 2）。「これらのホラティウスの作業において、われわれは諸写本の助けよりも推測という手段によって読みを与える。そして、もし私がまったく誤っていなかったならば、ほとんどの場合、より確かな読みである。というのは、異なる読みが存在するところでは、権威がしばしば人々を欺き、そして、哀れな切望を癒やそうと強いる。しかし、推測がすべての写本の証言に対して提示されるときには、恐れはなく、恥辱の感覚が人々の耳をつまむこともなく、理性のみと、意味との必然性の明晰さ自体が君臨する。さらに、もしあなたがある写本や別な写本から異読を産みだしたとし、100の証言に対して、1つか2つの証言によって権威に訴えても、あなたがそれを、ほとんど写本の証言なしに、それらの証言に基づいて結論するために十分な論議を支えなければ、あなたは何も達成できないだろう。それゆえ、写字生だけを崇めてはならず、そうではなく、あなた自身の知恵をもちださない。そうすれば、あなたが言論や言語の性格という一般的な浮沈に抗して個別的な諸点をそれらに基づいて検証したときに初めて、あなたはあなたの見解を述べ、あなたの判断を下すのである」。啓蒙期において、ホラティウスの「勇気をもって分別を持て」（sapere aude）が帯びた価値については Venturi 1959 を見よ。しかし、敬虔なベントリーは、無神論者や有神論者の激烈な反対者であり（本稿 135 ページ以下を見よ）、彼の「啓蒙主義」はテクスト批判に限られていた。

ルトンへの推測は、ミルトンの趣向と異なる趣向と、それに対応する詩的言語を対置させる、文学的批評の間接的な形式なのである。しかし私見では、このような種類のことがなにかしかなら、彼のホラティウスの校訂版においても、小さな程度とはいえ起こっている。すなわち、ホラティウスに対するベントリーの数百に及ぶ推測は、そのきわめて多くの場合において、伝承されてきた読みに対するのではなく、詩人に対する「校訂」なのである。それらの校訂の多くは、厳密な意味において、単純な合理性に還元することのできない、いかなる詩的言語にも（きわめて多様な形式と範囲において）本来的に備わっているものについての彼の無理解を示している⁴⁰。

ベントリーよりも才知と射程の広さにおいては劣っているが、テキスト批判において彼の強力な範例に従った、18世紀前半と19世紀後半のイギリスの文献学者たち（マズグレイヴ、ポーソン、ドーブレ、エルムズリー）は、とりわけ推測家であり、言語学的、韻律的用法について、とくにギリシアの喜劇と悲劇の朗唱的部分について、洗練された知識を備えていた。しかし、彼らはまた、諸写本を参照する必要性も感じていた。そして、もしポーソンが、エウリピデスと他の悲劇作家たちの『『より新しい』写本だけしか存在していないイギリスから動いたことがないという事実によって条件づけられていた』⁴¹としても、彼の前にサミュエル・マズグレイヴはパリに赴き、エウリピデスの二つの重要な写本を校合したし、彼ののちにはピーター・エルムズリーがイタリアを訪ね、ソポクレスのラウレンツィアーナ写本を研究し、初めてその優越性を明らかに認識し⁴²、そして、ヴァチカン図書館のエウリピデスの諸写本を校合して、概ね正確にそれらを評価した⁴³。われわれはまた、彼に、アイスキュロスの全写本が、「古代文学の全般的な難破の中で残存したように思われる、同一の写しから」⁴⁴派生したという示唆を負って

40 私はこの点で少し留まることにする。というのは、ベントリーについての幾つかの書物（Goold 1963; Shackleton Bailey 1963: 105-115; Brink 1978: 1087-1164）は、新しい観点と才知に溢れる考察を加えているが、それにかかわらず、ベントリーのすべてについて無差別の称讃へと向かっている——彼の偉大さは、あらゆる学者、最大の学者においてさえ所有されている限界の認識によって減じることはないのであるが。このことはとりわけ、別の点ではベントリーの個性をもっとも深く掘り下げた当事者であるプリンクの論考において際だっている。ベントリーの推測の大胆さに対する多くの批判者は、近視眼的な保守主義者として責めることができるが、以下のようなハウスマンの観察を無効するのは難しいだろう。すなわち、彼は、すでに引用したマニリウスへの序文（Housman 1937 [1903]: xvi infra-xvii）において、ベントリーによるマニリウスの「誤り」について、それが「ベントリーの他の批判的著作の誤りである」と述べていることを見られたい。類似した留保は、ルカヌスの序文（Housman 1927: xxxii-xxxiii）においても繰り返されている。さらに、推測家として最悪の誤謬をベントリーは、ホラティウスのテキストではなく、セネカの悲劇作品のテキストでおこなった。U・モニカによるパラヴィア版（トリノ、1947年、第2版）のテキスト編集資料に目を通すならば、われわれは、ベントリーの留意にほとんど値しない推測とともに、他に無数の、まったく無益で、「暴力的で」、悪趣味でさえあるものを見いだすだろう。そこには、カリマコスの才知に溢れた修正者を認めることができないだろう。

41 Di Benedetto 1965: 10.

42 Cf. Jebb 1900 (1886): liv.

43 Di Benedetto 1965: 11-12.

44 Elmsley 1810: 219. その章句はDindorf 1876: 405によって報告されている。その正確な解釈（諸写本は、ディンドルフが理解するように、中世の写本からではなく、いまは失われた祖本から派生したものである）は、ヴィラモヴィッツの『アイスキュロスの悲劇集』の序文（Wilamowitz 1914: xxiii）に負っている。

いる。われわれはすでに、祖型という概念がエルムズリーよりも3世紀前に遡ることを知っている。しかしながら、エルムズリーがアイスキュロスの祖本について、文明の「難破」を免れた唯一の写本と見なした、厳密に「中世的」概念は興味深い。というのは、それはマズヴィクとラハマンの定式化に先んじているからである。アイスキュロスのテキストについて、現在ではこのような種類の祖型を考えることができないということは、また別の問題である。

しかし、ベントリーから彼のイギリスの後継者たちを切り離したくないという私の願望によって、時をあまりに前へと進ませてしまった。そこでわれわれは、今や、歩みを戻して、いかにして「新約聖書」の文献学がテキスト批判の方法論において偉大な進展を遂げることになったのかを示すことにしよう。

第2章 18世紀における体系的校合の要請

校合の技法をスカリゲルとともに留まっていた地点から発展させたのは、上述したように、ギリシア語新約聖書についての研究だった。それについてジョルジョ・パスクアリー (Pasquali 1952a [1934]: 8) はこう述べている。「校合に関しては、世俗的な文献学 (philologia profana) は……今もってしても、それとは知られることなく、聖なる文献学 (philologia sacra) に帰属している」。そして、彼はその理由も示している。新約聖書はきわめて豊かな写本の伝統を有しており、そこに推測的批判をおこなう余地はほとんどないか、まったくない。したがって、前面に現われるのは、無数のヴァリエーションの間で選択し、諸写本のさまざまな権威を見定めるという問題である。そして、ここにおいて、批判的＝テキスト的なあらゆる問題は、とりわけ強い関心を引き起こす。というのは、それは純粋な文献学の域を超えて、神学的な問いを含む、あるいは少なくとも含むからである。

ギリシア語新約聖書の「最初の印刷本」(editio princeps) は、エラスムスによって編纂されたのだが、この偉大な人文主義者のもっとも不幸な刊本のひとつであった。というのは、それは性急に遂行され、また価値の乏しいビザンティン写本に基づいていたからである⁴⁵。しかしまた、ここに、われわれが第1章の冒頭で思い起こした現象が生じる。すなわち、後続する諸版の大部分は、いくつかの混成を含んではいるが、「最初の印刷本」のテキストを再生産したのである。ライデンのエリゼヴィエール (1624年と1633年) が刊行した版の一つはきわめて広範に流布し、プロテスタントの教会によって受け容れられた (いわゆる「受容テキスト」[textus receptus])⁴⁶。

⁴⁵ Waszink 1979:75-77によれば、エラスムスの批判的＝テキスト的貢献は、がいして、印刷者たちが利用するために急いで準備された古典のテキストの諸刊本に求めるべきではなく、ギリシア語テキストの彼のラテン語訳に採り出さなければならない。

⁴⁶ Gregory 1900-1909: 2.937-42. (いまだに基本書)。より簡潔できわめて明快な説明は Hundhausen in Wetzler-Welte 1882-1903: 2.608-9. Metzger 1968 (1964) の第3章と第4章 (第2版の最後の追記を見よ) は、情報量が豊かで最新である。しかし、18世紀の新訳聖書の批判家たちの独特の個性については、十分に際立たせて識別されていない。そして、第6・7章が明らかにしているように、著者は最近のテキスト批判の原理と方法について必ずしも明るいわけではなく、そのことが彼の歴史的な説明を少し

そのときから、ページの下部にヴァリエントを積み重ねることが許されるようになった——ジョン・ミルは、他のだれよりも多く、1707年のオックスフォード版にヴァリエントを収集した。しかし、テキストに変更をもたらそうとするあらゆる試みは、たとえより古い諸写本の権威に基づいていたとしても、神学者たちからの強烈な反対に遭遇した。「もしたれかが……批判的判断を適用し、単語あるいは文字あるいは符号を変更することを試みたとするならば、ただちに不敬な者として、非難の声で彼を切り裂き、そして異端として、猛烈に彼を狩り立てるだろう」とヴェトシュタイン (Wettstein 1730: 158) と書いているが、彼自身がこれらの神学的嫌悪によって辛い目に遭ったのである。

このような不寛容は、カトリックの国々よりもプロテスタントの国々において強かった。「宗教改革にとっては、カトリシズムとは異なり、聖なる書物は真理の唯一の根源であり、そして同時に、カトリシズムにおけるのはまったく違い、すべての民が読む唯一のものである。もし、他のすべての確実性が依拠している第一の確実性が不確実なものに変わるのならば、何が起こることになるだろうか」⁴⁷。しかし、付け加えておかなければならないのは、受容テキストが〈伝統〉として崇敬され、古い諸写本への帰帰が無謀な改変と見られたという同様な誤謬は、神学者たちだけの特徴づけていたわけではなく、また古典文献学者たちの間にも流布していたということである。それは、われわれがすでに想起こした、流布版を底本として用い、諸写本と推測を参照しながらそれを訂正するという方法論的誤謬に由来していた。

この不合理な保守主義の形式を打ち破るためには、新約聖書の領域においてはとりわけ熾烈な戦いが必然であったとしても、古典文献学においても、エルネスティ、ライスケ、ルーンケンが苦勞しなければならなかった⁴⁸。そして、ダンテ文献学においても、傑出したヴェローナの文献学者バルトロメオ・ペラッツィーニ⁴⁹が苦勞しなければならなかった。加えて、彼はほとんど孤立していたのであり、こうしてイタリアにおいては、かの先入観が19世紀にまだ続いていた。トーマーズ・ヴァッラウリが擁護したプラウトゥスの読みの多くは、史料上の権威がほとんどない、あるいはまったくない、もしくはごく最近の推測である流布版の読みだった。それにリッチェルはしばしば、自身の推測ではなく、アンブロジーアーナ図書館のパリンセットの読みを対置させたのである⁵⁰。

さらに、受容テキストのもっとも執拗な擁護者はプロテスタントではあったが、一方で、宗教改革の精神は新約聖書のテキスト批判を、その結果として、古典テキストの批判を推し進めることにもなった。ここでもヴェトシュタインは、彼の迫害者たちに対し

損なっている。

47 Pasquali 1952a (1934): 9. そして、次の言葉で終えている、ヴェトシュタインの素晴らしい讃辞を見よ。「テキスト批判という技法的な領域においてさえも、偉大な発見は多くの場合、高邁な者たちの所産である」。

48 ライスケとエルネスティについては原著 40 ページ以下を見よ。ルーンケンについては Ruhken 1875 (1789): 21 を参照。

49 以下の註 87 を見よ。

50 Vitelli 1962: 130-31 を参照。

て、宗教改革を惹き起こした諸原理に訴えかけた⁵¹。彼が理解していたのは、その諸原理が活力を保っているのは、プロテスタントの大きな教会（ルター派、カルヴァン派、英国国教会）が、勝利を獲得し、政治的権力の承認あるいは権力自体との同一化を獲得した国々で発揮していた教条主義の中ではなく、プロテスタント自体の「異端的」傾向の合理主義的な展開（あるいは、しばしば合理主義かつ神秘主義的な、しかし観想的で不活発ではなく破壊的な神秘主義的発展）の中であった、ということである。

このような流行に、プロテスタントの主要な批判家たちは属していた。ジャン・ル・クレルクはアルミヌス派だった。そして、彼よりも強烈な個性とより広い関心を抱いていた二人の人物、すなわちゲルハルト・ヨハネス・ヴォッシウスとグロティウスがすでにこの派に属していたのであり、彼ら（とくに法律、神学、現実の政治に充てられた活動にかかわらずグロティウス）は、文献学、さらに古典文献学に顕著な貢献をなす時間をつくりだしていた。ヴェトシュタインはソツォーニ派、あるいは少なくともその疑いがあった。ゼムラーは強力な理神論者だった。ルター派で慎重なベンゲルは敬虔主義者だった。そして、彼の『ヨハネの黙示録』の註解において千年王国的な傾向を同意しており、この点において、英国のメソジストに影響を及ぼした。それに対して17～18世紀のカトリック教徒は、ギリシア語新約聖書の批判にはほとんど寄与していない（著しい異端であったリシャル・シモンは別にして）。そして、ラテン語のウルガタ聖書についてのテキスト的探究は、シクストゥス＝クレメンズ版が折衷的な基準によってテキストを決定したのちには、ほとんどすべてが止んだ⁵²。

われわれはリシャル・シモンとジャン・ル・クレルクの名前を挙げた。両者ともにまだ、厳密な意味では、新約聖書を校訂する企ての歴史には属していない。シモンはとりわけ、旧約・新約聖書の真正さ、階層化、歴史的批判に関心があったが（それは、旧約聖書について、シモンの同時代で、われわれがこれまで名前を挙げた誰よりも偉大な、別の「異端者」で、ユダヤ教の神学者からもキリスト教の神学者からも嫌われていたバルーフ・スピノザがおこなったことである⁵³）、しかしテキスト批判には、厳密な意味

51 Wettstein 1730: 158. そしてとりわけ 1734: 220.

52 シクストゥス＝クレメンズ版については Quentin 1926: 18-20 を見よ。教父たちのテキストの校訂版を、諸写本の体系的な校合に基づかせようとした、カトリック圏内でおこなわれた試みについては、Petitmengin 1966 を参照。（正確で理知的な論考であるが、いくつかの弁護論的な誇張もある。）プファイファーのカトリック的な視点が、この傑出した、きわめて惜しまれる学者が、古典文献学の歴史にとっての重要性が指摘されたのちにも、新約聖書のテキスト批判の発展を理解するどころか、語ろうとすることを拒んでいた。プファイファーにおいては、ベンゲル、ゼムラー、グリースバハは名前すら挙げられておらず、ヴェトシュタインについては一箇所、取るに足らぬ言及がある。そして、ル・クレルクはある意味で、エラスムスの著作集の彼の版（137）のおかげで、カトリックの水路に引き戻された。

53 たとえば以下の、註 72 を見よ。新約聖書のテキスト批判者としてのシモンに対する長い無視ののちに、レイノルズ＝ウィルソン『写字生と学者』（Reynolds-Wilson 1991 [1968]: 188）によってなされた要求を読むことは喜ばしいことである。しかしながら、テキスト批判の真正な方法論に関わる点では、彼らは行き過ぎている。シモンの『新約聖書のテキストの批判史』（Simon 1689: 336-416）の第 29～32 章は、革新的な方法的基準というよりも、むしろ個別的な重要な観察（たとえば 250 ページにおける、ケンブリッジのいわゆるベザ写本の価値について）を含んでおり、それにもはや時代遅れとなった別の陳述が混ざっている。たとえば、シモンは——こののちに引用する章句に見られるように、テキストの伝達における陳腐化の経過を観察していたが——「より強い力をもっているように見える表現を含む」

では、いくつかの目を見張る暗示を与えただけだった。

ル・クレルクはこれらと同じ問題に、きわめて合理主義的な基準によって専念したが、多くの点でシモンとは意見を異にしている。文献学者として彼は、「世俗の」ラテン語とギリシア語のテキストを取り扱い、多くの版を校訂したが、優れたものは存在しない。しかし、われわれが本書の冒頭において言及した（註1）彼の方法論的論考、すなわち『批判技法』は、文献学への衝動が、彼の異端的の神学に由来することを明示している。彼は自らの諸原理を同様に、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語に適用した。そして、彼の著作の第2版から第4版まで、2巻の本文のあとに、第3巻目の『批判的・聖職的書簡——この中では批判技法が示され、第3巻と見なすことができる』（*Epistolae criticae et ecclesiasticae, in quibus ostenditur usus Artis criticae, cujus possunt haberi volume tertium*）が付け加えられた。そして、とりわけ『批判技法』が利用した例については、旧約聖書の章句から、さらに多くは新約聖書の章句から採られている。

彼が新約聖書のテキスト批判をさらに集中して浴びせているのは、『ミル版についての書簡』（*Epistola de editione Milliana*）であり、それはルドルフ・キュスターが刊行した『ギリシア語新訳聖書』（ロツテルダム、1710年）の序文のあとに見いだされる（ページ付けなし）。彼はここで、われわれが少し後に（註74）引用する「より短い読み」（*lectio brevior*）という基準についての制限を表明しており、そして、ミルからはほとんど顧みられなかった非間接的伝統に多大な重要性を与えているが、しかしそれを過大評価はしておらず、直接的な伝統の相違が記憶による誤謬に起因している章句と、それに対して、おそらくはより良い読みを保存している章句を区別している。

このことは、彼の文献学者としての、たしかに偉大ではないが、しかし際立った個性を正当な評価するために注意しておくべき点である。たしかに彼を、メナンドロスとフィレモンの断片について、ベントリーとおこなった有名な論争だけから判断するならば、容易に厳しい評価に到達するだろう。すなわち、ル・クレルクのギリシア語の韻律の知識は当時の標準以下であったが、ベントリーのそれは同時代人たちに先んじていた。ベントリーの勝利は明らかであった。しかし、このことは、あたかもこの不幸な結末がル・クレルクの〈すべて〉を示しているかのように、あたかも『批判技法』が存在しなかったかのように、「無益で虚栄に満ちた人間の精神的な逸脱」（Brink 1978: 1140）について語ることを正当化するわけではない。

ル・クレルクがこの著作の中で何度も表明している保守的な傾向、そして、「とうてい自らの思想を表わすことができない作家がより優雅に、より如才なく語るだけのように創出された」⁵⁴推測に対する彼の批判は、ル・クレルクがしばしば明らかに引用し

読みに対して、「より単純な」読みを好むことを宣言している（277ページ。したがって「より容易な読み」[*lectio facilor*]を選択する）。そして、彼はまだ、大多数の写本という基準を信じていた（同上）。ベントリーの『企画』（原著34ページ以下）が、シモンの著作よりも「ほとんど前進していない」と述べるのは馬鹿げている。

⁵⁴ Le Clerc 1730 (1697): 2.269. ル・クレルクはこう付け加えている。「というのも、いったいいかなる作家が、主題がけっしてよく表わされないほど完璧に文章を洗練したのだろうか。これに類似した考察はヴィラモヴィッツ『古典文献学の歴史』（Wilamowitz 1967 [1927]: 148）がおこなうだろう。彼はこれを、すなわち「古代に帰されていた正統的価値に由来する」、絶対的完全性という先入観を乗

ているスカリゲルと、たしかにオランダの文献学者たちの大部分を標的に定めている（おそらくはまだベントリーは射程に入っていない）。しかにそこに、テキストの偉大な校訂者たちに対抗する、推測する能力に乏しい、凡庸な者の吐露だけを見るのは誤っているだろう。ル・クレルクが活動した時代と環境においては、彼の批判は正当なものだった。さらにル・クレルクは、古代のテキストが多くの点で毀損していることをよく知っている。彼は、多くの推測は中世のものではなく古代のものであることを知っている。そしてこのことを彼は、豊富な証言によって記録している（Le Clerc 1730 [1697]: 2.12-27）。

おそらく彼は、のちに主張され過ぎることになる、いわゆる古文書学的毀損の重要性について、あまりにも少ない関心しか抱かなかった。そして、彼は心理学的毀損に知的な関心を払ったが、それは「同一のものから同一のものへの跳躍」（saut du même au même）と呼ばれることになる現象のような（Le Clerc 1730 [1697]: 2.48-56. 彼の例はあまり説得力がないが）、そして、俗語的発音に負っている誤謬のような（Le Clerc 1730 [1697]: 2.56-78）、より機械的な毀損から、同義語による置きかえや他の類似した現象（Le Clerc 1730 [1697]: 2.5）まで及んでいる。彼は、誤謬の大部分が、写字生たちが一語一語を書き写していたのではなく、「句全体」を書き写し、あるいは「時間を節約するために全文章を読んで、そののちに書き記した」（Le Clerc 1730 [1697]: 2.5）ことを理解していたし、その点でも時代に先駆けていた。

彼は、推測が毀損の創出を説明しうることを要求しているが（Le Clerc 1730 [1697]: 2. 277）、これを絶対的な要求として要請しているわけではない（「もしそれが為しうるならば」）。実際に彼は（Le Clerc 1730 [1697]: 2.278 e spec. 9）、「説明しえない」毀損の存在を認めている。というのは、写字生は、あるいは——同じことになるが——朗読者は、モデルのテキストを、その瞬間に自らの脳裏の浮かんだ思考に関係する、まったく異なった言葉に置き換えることができたかもしれないからである——われわれは「フロイトの言い違い」（lapsus freudianno）からあまり遠くないところに、実際には、ある点ではそれをはるかに超えたところにいる。というのは、このような置き換えは、音と意味の類似性によっては、つまり、フロイトが「好都合」（Begünstigungen）と呼ぶことになるものによっては容易に起こらないだろうからである。

ル・クレルクは諸写本の系図については関心がなく、一般的にもっとも古い諸写本を選ぶことに留まっている（Le Clerc 1730 [1697]: 2.290）。しかし、校合者たちの再評価が正当化され、成果を生み出すのは第二の局面になってからであり、最初に必要な段階は、人文主義の時代の、しばしばあまりに改竄された諸写本に関して疑念を抱くことでなければならなかった。ル・クレルクによる、他の校合上の基準に関する事柄（「写字生の習癖」[usus scribendi]、「より難しい読み」[lectio difficior]）についての貢献については、ほとんど言及することにしよう。このようにしてわれわれは、より明瞭に、『批判技法』（幾度も版を重ね、それゆえ広く流通したことを、われわれは思い起こそう）が、

りこえた、最近のテキスト批判の成果と見なすのである。さらに Le Clerc 1730 (1697): 2.10-11, 259 e altrove を参照。

そのすぐのちに起こる、新約聖書のテキスト批判の発展に向かって、きわめて広い道を敷いたのである。

しかし、歴史は——たとえ限定された問題の歴史であっても——、曲がりくねった道を進む。それゆえ、一般的な前提としての「受容テキスト」(textus receptus)を超える新約聖書の版という最初の計画は、われわれがすでに示唆した、そしてのちに語ることになる宗教改革者たちの一人ではなく、文献学において才智に溢れ、かつ大胆であるが、宗教の問題では正統的な人物、すなわち、リチャード・ベントリーに負っていた。彼は、文献学的な関心それ自体にもまして、まさに宗教的正統性という目的によって鼓舞された。すなわち、アンソニー・コリンズが率いる「自由思想家たち」(実際には無神論者ではなく理神論者)に対して、聖書のテキストの権威を目的によってである。

ミルが、すでに述べた1707年の版(本稿131ページ)において積み重ねた新約聖書の写本的伝統における数多くのヴァリエーションの存在は、自由思想家たちにとっては、福音書の真正性と真実に対抗する議論であった。それは、福音書を厳格に遵守するプロテスタントの神学者たちにとっては、テキストの「不確実性」についての同様な論争的利用を恐れることの動機であり、それゆえ、受容テキストから離れることを拒否した。ベントリーにとっては、それは、テキストのより堅固な基礎をつくための動因をもたらし、それによって懐疑主義を打ち破ることになるはずだった⁵⁵。

それゆえ彼は、もっとも古いギリシア語の諸写本と、ラテン語のウルガタ聖書と教父たちのテキストにおける引用との対照に基づいた版を計画し、それはニケア公会議の時代にあった伝統の状態を再構築するはずのものだった⁵⁶。彼は、きわめて豊かで古い伝統をもつ作品においては、校合は推測的批判に先立つべきであることを理解していた(Bentley 1836-38: 3.488)。しかし、彼の計画は、上述したように、宗教的な題材においては破壊的なところがまったくない意図によって書き記されたのであるが、それにもかかわらず、神学者たちの批判に出会った。そしてベントリーは、他の仕事を抱えていたために、またこのような膨大な仕事を遂行する困難さ自体のゆえに、この企図をついに諦めることになった⁵⁷。

たしかに、受容テキストを改良するための、より実現しやすい方法が存在していた。ミルのテキスト資料を参照しながら、テキストのなかに個別的により信頼しうる読みを導入することができた。さらにある場合には、推測に頼ることもできた。最初の手法はすでに1709年から1719年にかけて、すなわちベントリーの『企図』以前に、神学者に

55 ベントリー (Bentley 1713 = Bentley 1836-38: 3.287-368 [spec. 347-61]) におけるコリンズへの論駁を見よ。

56 Bentley 1721 = Bentley 1836-38: 3.477-86. Gregory 1900-1909: 2.949-50; Fox 1954: 105-8; Metzger 1968 (1964): 109-10; Kenney 1974: 100 (ベントリーが1716年に大主教ウィリアム・ウェイクに宛てて書いた書簡の肝要な部分が引用されており、そこにはこの計画の本質的な輪郭が含まれている); Brink 1978: 115-52 (彼が、ニケア公会議以前の時代へと遡ることのベントリーの拒否に含まれる方法論的な自覚が強調しているは理に適っている)を参照。先に引用した『所見』(註11)において、ベントリーによってすでに示唆されている「地理的基準」については、以下(原著55ページ)を見よ。

57 彼が未完のままに残し、現在ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ図書室に保管されている原稿の一部は、より遅く、Ellis 1862 によって刊行された。

して数学者のダニエル・メイスとエドワード・ウェルスによって採用されていた⁵⁸。最初の手法と次の手法はともに、長老派のダニエル・メイスによって採用された⁵⁹。両者とも受容テキストをきわめて注目すべき改良をもたらし、勇気があり、文献学的に価値のある仕事を成し遂げた。しかしながら、いまだに、写本に基づく (ope codicum) 訂正も、より稀に、推測に基づく (ope ingenii) 訂正も気紛れになされたものだった。

ベントリーの計画は方法論的により革新的なものだった。というのは、彼は受容テキストをすべて脇に置いて、常に諸写本を参照することを意図したからである。この道に沿って、18世紀における二人の偉大な新約聖書批判家、すなわち、すでに彼らの宗教的位置のために言及した、ヨハン・アルブレヒト・ベンゲルとヨハン・ヤコブ・ヴェトシュタインは進み、それをさらに発展させた。彼らはテキストへの介入の点で、ウェルスやメイスよりも慎重であったが（というのも、それは、大陸のカルヴァン派とルター派のヨーロッパでは、国教会のイギリスにおけるよりもはかに危険なことだったからである）、理論的な問題においてはより鋭かった。

二人のどちらとも、相手には知られないように気遣っていた。そこから、彼らの論争と彼らの相互の無理解が生じた。ベンゲルの功績は、初めて諸写本の中の類縁関係を決定しようと試みたことである。「諸写本は、同じ古い配置と署名とその他の付随物をもっているならば、互いに密接に関係している」⁶⁰。これらの手掛かりに加えて、彼はまた読みの共通性を基盤としたが⁶¹、まだ、真に証拠となる唯一のものである、毀損の共通性と、正しい読みの共通性を区別することには至っていない。彼が遠い将来に見ていたのは、新約聖書の伝統の全歴史は「系譜表」(tabula genealogica)、すなわち、のちに「諸写本の系図」(stemma codicum) と呼ばれることになるものの中に要約されるること

58 Metzger 1968 (1964): 109 e n.1. 私はウェルスの版を見ることができなかった。

59 [Mace] 1729. Gregory 1900-1909: 2.950-51 (e 3.1360); McLachlan 1938-39 (この論考はイタリアでは見いだすことができず、E.J. Kenney の尽力で参看することができた) ; Metzger 1968 (1964): 100-12 を参照。18世紀の後半部に属する、イギリスの新約聖書の他の批判については Metzger 1968 (1964): 115-17 を見よ。

60 Bengel 1763a (1734) :18 (ギリシア語新約聖書のテキストへの付録) . 1763年版は、『正しくかつ注意深く準備されたギリシア語新約聖書の先駆』(*Prodromus Novi Testamenti Graeci recte cauteque adornadi*) —すでに、ヨハネス・クリュストモス『司教職について』の版 (Bengel 1725) の冒頭に公開されていた—を含んでいる (625-952.) ベンゲルはまた、キケロの『親近書簡集』と、既述のテキストに加えて、いくつかの教父のテキストを校訂した。彼については Nestle 1893 (その煩わしい擁護的な調子にもかかわらず有益) ; Nolte 1913; 今は Mälzer 1970 (十全なモノグラフであるが、ベンゲルをテキスト批判家よりもはるかに神学者として論じている。ともかくも、さまざまな書簡上の証言にとって有益な第6章を見よ)を参照。「批判的テキスト資料」(Appatus criticus) という表現(おそらくベンゲルによって最初に用いられた)と、彼による記号の使用(しかし、ギリシア文字は諸写本ではなく、さまざまな読みの「価値の度合い」を指示している)については Kenney 1974: 156 e n.4 を参照。ヴェトシュタインはこれらの記号を、諸写本を明示するために用いることになる(大文字写本のためには大文字が、小文字写本のためにはアラビア数字が充てられる)。Metzger 1968 (1964): 114 を参照。この使用の先駆者 (Savile 1612) については Kenney 1974: 157 infra を参照。一般的に、批判版の発展については Kenney 1974: 152-57 を見よ。しかしまた、人文主義の時代については Rizzo 1973: 301-23 と、その索引において「諸写本を指示するための記号」という項目 (p.390) に挙げられた章句を見よ。

61 Bengel 1763a (1734): 18. 「しかし、いくつかの読み自体が検討されるならば、それらがともに進行するのが常である」。そして彼は続いて、諸写本のさまざまなグループ化を挙げている。

になるだろうということである⁶²。

それだけではない。ベンゲルが明白に見てとったのは、一つの類似した系譜的分類が、いくつものヴァリエーションの間での選択にとって確実な基準を与え、こうして、最多性という古い、誤った基準を凌ぐことができるだろうということである。「二つかそれ以上のグループが、しばしば合致するならば、一つのものに相当する。二つかそれ以上の写本が一致するならば、一つのものに相当する。一方、それらが互いに異なる場合には、多数のグループや写本と一致するものが、現存しているメンバーの逸脱を無効にする」⁶³。それゆえ、重要なのは、ある読みは諸写本の多数性によってではなく、ファミリーの多数性によって確証されるということである。各々のファミリーの内においてだけ、その祖先の読みを再構築するために、諸写本の多数性が価値をもつ。これはすでに、のちにラハマンが展開し、パウル・マースが『テキスト批判』(Mass 1958 [1927]: p.6, sec.8)で「特異な読みの排除」(*eliminatio lectionum singularium*)——これは適切な表現ではないが、より良い表現がないゆえにわれわれも用いることにする——と呼ぶことになる手順、すなわち、ある伝統があまり混成されていない場合に従うべき手順である。

さらにベンゲルは、いっそう明白に、ある読みの古さの保証は〈さまざまなファミリーに属している〉諸写本の一致によって与えられる、と主張している⁶⁴。もちろん、新約聖書のように、ひどく混成された伝統に、ベンゲルはこれらの基準を直接的に適用することはできなかつた(より新しい研究者たちもできなかつた)。これらの基準は、より単純で機械的な伝統に適応されるときにかぎって成果を生んだ。それに加えて、論争(実際にすぐに勃発した)と迫害の恐怖によって、ベンゲルはテキストの中に、「先行の

62 Bengel 1763a (1734): 20. 私は、すでに Gregory 1900-1909: 2.908 と Pasquali 1952a (1934): 9 によって引用されている章句全体を引用はしない。ベンゲルはこう付け加えていた。「われわれの推測は巨大な素材を有しているが、手放すことにしよう、真理が笑う者の危険にさらされないように」。それゆえ彼は、この企てがより適った時代に先送りにすべきだと考えていた。この“*manum de tabula*”は、ここでは「手放す」と理解できるが、周知のラテン語の格言的表現であり、「終わりにしよう」、「もう十分だ」という意味である。しかし同時に、彼がすぐ前に述べていた「系譜表」(*tabula genealogica*)に戯れに言及している。

63 Bengel 1763a (1734): 21. 「現存しているメンバーの逸脱」とは〈今、存在している〉グループに見いだされる読みの逸脱を意味しており、それらのモデルに見いだされなかつた読みについてではない。

64 Bengel 1763a (1734): 65. 「しかし、源泉に、すなわち最初の手にもっと近く、互いにもっとも遠く離れている諸証拠の多様性は価値がある。こうして、それらは一致によって真正な読みを明示する。Ibid: 68. 「もしその一致が諸写本の多様性を包みこむならば、あらゆる疑念は消え去る」。これらの文脈全体からは、ベンゲルがこの「遠隔性」や「多様性」を地理的な遠さというよりも、さまざまなファミリーへの帰属という意味で理解しているように思われる。同様にのちにグリースバハ(Griesbach 1796 [1774]: x. lxxii)もこう述べている。「そして、もし実際に異なるものとして考えられうる諸証拠が、互いに友好的に一致するならば、結局、それは諸証拠に権威をもたらす一致と評価しなければならない」。それにもかかわらず、ベンゲルは新約聖書の写本の伝統の中で、「アジア産」と「アフリカ産」を区別していたので、「遠隔性」は地理的な意味もまた帯びるようになった。それはすでにベントリーが示唆していたことで、そののち、ラハマンにおいてより明確になる。以下の原著の55ページを見よ。さらに、地理的な意味は、ベンゲルの後期の著作(Bengel 1763b [1742])においてより明白になる。この著作の sec.viii, regula v. 「これらの写本はあらゆる時代とありゆる地方(*climates*)の教会を通して広まり、そして、あらゆるヴァリエーションの多さにもかかわらず、一緒に、真正の読みを示すほど最初のテキストに近づいた」。ここで、*clima* は後期古典期のラテン語におけるように、地域、地方だけを意味している。

刊行者によってすでに採用されていなければ、一つの音節さえも」⁶⁵ 取り入れることを控えた。こうして、彼の版本は、テキスト編集資料で開示された方法論的諸原理よりもはるかに劣る結果となった。

ヴェトシュタインは、ベンゲルよりもはるかに好戦的な精神の持ち主で、ベントリーによって、そして他のイギリス人たちによって開始された受容テキストに対する論争を推し進めた⁶⁶。そして、ベンゲルが自らの思慮深さを正当化するために持ちだした論証を容易に粉碎した⁶⁷。そして、他の者たちが従った、外見的に合理的な基準さえも（「受容テキストで拒否する理由が見いだされない箇所に執着すること」）、ヴェトシュタインは攻撃した。というのは、彼はこのような態度の中に、版本の基礎として諸写本ではなく受容テキストを取り上げ、その結果、真の毀損ではないにしても、きわめて多数の陳腐化を放置すること（1730: 167）が継続されているという事実を明瞭に見てとっていたからである。

彼もまた、死去する直前の最後の版本において、全般的に、自分の受容テキストとの相違を、註の中で表明するのにとどめているが、そのことは、彼がそれまで耐えなければならなかった迫害（福音書のテキストを改変することによって、キリストの神性を否定することを狙っているという非難、司牧の職務の罷免、バーゼルからの追放、アルムテルダムへの避難）について考えるならば説明しうる。しかし、ベンゲルが思慮深く定式化していた諸写本の系譜的分類化の基準に対して、ヴェトシュタインは何の関心も抱かなかった。彼は多数性の基準を攻撃するのに留まっており、ベンゲルが虚偽の推論であることを証明した論議を理解することがなかった⁶⁸。

しかしながら、ヴェトシュタインは、彼の思索のもっとも興味深い局面を表わしている、1730年の『プロレゴメナ』（*Prolegomena*）において、読みの選択において、「写字生の習癖」（*usus scribendi*）と「より難しい読み」（*lectio difficilior*）という内的基準に優位性を与えている。この点においてベンゲルと彼は一致を見いだしていた。ベンゲルが明言するところでは、二つの読みがそれら自体として等価であるときにのみ、「決定は諸写本のより正確な吟味にかかっている」⁶⁹。これらはラハマンが採用することになる立場に対立する。ラハマンは、二つの読みが外的に同等の権威をもっているときにのみ、「判断」（*iudicium*）に委ねられる。

これらの内的基準のうち、一方の「写字生の習癖」は古代の文法学者たちによく知ら

65 Bengel 1763a (1734): 607. 『ヨハネの黙示録』についてだけ、彼は大部分で新しい版を刊行した。

66 Wettstein 1730: 66-67. ベントリーとヴェトシュタインとの関係については Jebb 1889: 159; Bertheau 1908: 199 を参照

67 Wettstein 1734: 218-31 e 1751-52: 1.156-70.

68 Wettstein 1730: 195 さらには Wettstein 1734: 226-28; Wettstein 1751-52: 1.166-67. ヴェトシュタイン以前にも、諸写本の多数性の基準はゲルハルト・フォン・マースリヒトが（G. D. T. M. D すなわち Gerardus de Traiectu Mosae doctor のイニシアル名で）1771年にアムステルダムで刊行した新約聖書の刊本において正典化されていた。ヴェトシュタインは、最古の諸写本に特別な信仰はなく、この点でベンゲルと一致していた（後の註 33 を参照）。

69 Bengel 1763a (1734): 18. この立場は、現在は Waszink, p.87. によって、然るべき根拠に基づいて再確認されている。

れていた⁷⁰。そののち、15～16世紀の文献学者たちが広く利用していたが、それはおそらく、諸ヴァリエーションの間の選択のためというよりも、むしろ推測的校訂のためであった⁷¹。他方の「より難しい読み」の基準についても、古代から17世紀まで、散発的に先駆的試みを見いだすことができる⁷²。それを正確に定式化した最初の人物は、私が知っている限りでは、ジャン・ル・クレルクである⁷³。それゆえ、ヴェトシュタインとベンゲルは、すでに準備されていた土地を発見したのである。しかし、彼らには、とりわけヴェトシュタインには、これら二つの規範の理論的説明と適用にとってより十全な発展をもたらしたという功績は帰せられる⁷⁴。第二の時期においてようやく、ヴェトシュタ

70 とりわけアリストアルコスについては Lerhs 1882: 354-46; Pasquali 1952a (1934): 233, 240-41; Pfeiffer 1968: 228-28 (しかしながら、ここではそれ以上のことが期待されることが許されるだろう)。「写字生の習癖」について、アリストアルコスはたしかに、過剰な、類比に過ぎる適用をおこなっている。

71 それは、推測的校訂のために基準として、たとえば、Le Clerc 1730 (1697): 2.270-82.

72 たとえば、ガレノス『ギリシアの医学者たち』(Medici Graeci, ed. Kühn, 18.1.1005; 17.2.98, 101, 11)において(「これは古代の読みであるが、しかしそれをより明瞭にするために多くの解釈者たちによって改変されている」)。しかし、ガレノスはこの内的基準を、彼にとっては根本的な基礎として留まっている、より古い諸写本の権威を確認するためだけに用いている。ガレノスが従った章句についてのいくつかのさらなる明確化は、この小著のドイツ語版 (Timpanaro 1971: 19) においてD・イルマーがおこなっている。より古風な読みという基準(「より難しい読み」の特別な場合)は、プロプスによって受け入れられ (Servius auctus ad Aen. 12. 605)、ウェルギリウスの一節で flavo よりも floro が選ばれることになった。私は、これがプロプスによって任意に導入された古風主義であると確信することができない。だが、この一節については別のところで、より詳しく論じたいと思っている。中世においては、「より難しい読み」の暗示はイルネリウスに見いだされる。Kantrowicz 1921:31 を参照。17世紀においては、シモン (Simon 1689: 375-76) もまた、写字生が陳腐化する傾向があることに注目している。しかし、彼はそこから、読みの選択のための明確な基準を導きだすことはなかった。

73 Le Clerc 1730 (1697): 2.293。「もしそれら [すなわちいくつかの読み] の一つがより曖昧で、別の一つがより明快であるならば、実際、より曖昧な読みが真であり、他の読みが難語彙であると信じられる」。この定式化の唯一の欠点は、「より容易な、あるいはより明快な読み」のあまりに限定的な性格である。それは、ル・クレルクにとっては、テキストに侵入し、オリジナルの読みに取って代わった欄外註に、あるいは少なくとも〈意識的な〉陳腐化に常に起源をもっているだろう。だが起源も同程度に、あるいは程度は低いとしても、無意識の陳腐化なのである。

74 Bengel 1763a (1734): 17。「ある読みがより容易で、ある読みがあまり容易でないとき、古く、重々しく、短いものが選ばれる。あたかも思慮深く導かれたかのように、深い洞察と十全さによって魅了するものは、一般的に脇に置かれる」。より詳しい議論は Wettstein 1730; 179, 184 (「より難しい読み」について) と 188 (「写字生の習癖」について——それから彼は正しくも同一の言葉をもつ章句の繰り返しを区別している。これは一様化の疑いがあり、したがって「多様な」表現のために捨て去るべきなのである)。私はヴェトシュタインの文章をすべて引用しないが、それはすでに Pasquali 1952a (1934): 17 で引用されている。留意すべきは、すでにベンゲルにおいて、次にヴェトシュタインにおいて、そしてグリースバハにおいて、さらには最近のマニュアルにおいても、「より短い読み」が「より難しい読み」の亜種として比較されていることである。しかし「より短い読み」は、〈きわめて〉さらに不確実な基準である。というのは、もしより十全な読みがテキストをより明瞭なものにしようとする欲求に、あるいはさまざまな種類の改竄に由来するのであれば、もっとも短いものは省略によって起こりうる (Dain 1975 [1949])。とりわけ、文脈上は厳密に言えば必要がないが、真正のテキストには現存している言葉の無意識の排除に由来する場合はそうである。拙著『フロイト的言い違い』(Lapsus freudiano, Timpanaro 1976: 35-40)、および Rizzo 1977: 104-5 の他の例を参照。この点においてル・クレルクがきわめて注意深かったことについては、自らが証明している。というのは、彼はキュスターの校訂版(上述、本稿132ページ)に挿入した書簡において、『マタイによる福音書』(3: 11)の伝統の箇所を厳密に言えば必要がない二つの単語の欠如について、その真正性を支持していたからである。「これらの単語が付加さ

インはヴァリアントの選択における主観主義という非難を気にして、とりわけ写本の多数性という基準に執着する結果となったが、しかし、内的基準を拒絶することはなかった⁷⁵。

18世紀の後半部に、別の新約聖書の批判家、ヨハン・ザロモ・ゼムラーは、「外的な年齢」(äusserliches Alter)と「内的な年齢」(inneres Alter)を、すなわち、写本の古代性とそれによって保証される読みの古代性を区別した。すなわち、他の写本よりも新しい写本がより古い読みを保存しうるのである⁷⁶。このことはベンゲルと他の者たちによってそれ以前に指摘されていたが、このように自覚的ではなかった⁷⁷。結局、ヨハン・ヤコブ・グリースバハが彼の第二版の序論において、彼に先行する批判の諸結果を、教育的に完全な形態において要約したのであるが⁷⁸、しかし、彼もまた、受容テキストの不調和について十分に理解していたにもかかわらず、それから自由になるにはあまりに臆病だった⁷⁹。

* * *

れるべきであるという理由は存在しなかったし、それらは曖昧で、その章句の意味を明確するようなものは何も付け加えない。だが反対に、まさにこれらの理由によって、それらは曖昧で無益なものとして排除することもできたのである。すでに「より容易な読み」について、ル・クレルクは、しばしば起こる場合ではないが、意図的な改変について語っている。しかし、彼の論述は、それ自体としてまったく正確であり、「より長い読み」が「より難しい読み」でさえありうることを明示している。

75 Wettstein 1751-52 のはるかに充実した『プロレゴメナ』においては、ヴァリアントの選択のための「留意と注意」(Animadversiones et cautiones) はもはや見いだされない。しかし、それは校訂版の最後に、別物として再版されている。

76 Semler 1765: 88-89. ゼムラー (Semler 1765: 396) はまた、諸写本の多数性の基準に対して反論しているが、きわめて簡単なものである。この点に関しては、彼はベンゲルより進んでいないが、一方、少しのちにエルネスティが一步前進するだろう (「世俗的」テキストの批判において)。ベンゲルの諸写本の分類化を発展させている、ゼムラーが提示した分類化については、原著 54 ページ註 5 を見よ。

77 新しい諸写本が良い読みを持ちえるということは、たとえばニコラウス・ヘインシウス (Nicolaus Heinsius 1661: 2.195) によって述べられていた。「アルンデル写本は、新しいものであるが、しかしきわめて正確な読みを提示している」。しかし彼は、それが幸運な推測に負っているかどうか自問していない。ベンゲルについては、彼は「多様な読み全体はほとんど、現在に残っているギリシア語写本のはるか以前に生まれものである」と指摘するに留まっていた。それゆえ、古い諸写本は新しい諸写本に劣らず、すでに毀損を蒙っていたのである。この主張 (ヴェトシュタインによって共有されている) は、疑いもなく誇張されている——たしかに、ル・クレルクが指摘していたように、きわめて重要なヴァリアントと推測が、しばしば十分に古い時代に遡るのは真実であるが。

78 Griesbach 1796 (1774). 方法論的基準に関しては、彼の先行者たちに見いだされないものは、グリースバハの中にもない。したがって、たとえばメツガー (Metzger 1968 [1964]: 119) のように、彼を新約聖書のテキスト批判の「近代の批判期」の最初に置くのは誤っている。彼はある重要な時代を然るべき終わらせたが、新たな時代を始めたのではない。また「中間の読み」(lectio media; Griesbach 1796 [1774]: lxiii) の基準も、パスクアリー (Pasquali 1952a[1934]: 11) はその新しさを強調しているが、すでにベンゲル (Bengel 1763a [1734]: 17) によって定式化されている。「二つだけでなく、また多くの読みが存在するときには、中間の読みが最善である。というのは、あたかも中心からのように、この読みから他の読みが分散するからである」。これは、現代ではコンティニ (Contini 1955:134 e poi altrove) が「拡散」と読んでいるものである。しかしながら、グリースバハの論述は先行者たちのそれよりも明瞭で、かつ優雅である。

79 それにもかかわらず、彼は自らのテキストの中に、受容テキストとは異なる読みを導入した。

その間に、古典文献学者たちは、テキスト批判において、神学者たちの後塵を拝していることに気づいた。1730年にヴェトシュタイン (Wettstein 1730:166) が新約聖書の研究者たちに、従うべき例として、世俗のテキストの批判家たちを示すことができたのであるが、ヴェトシュタイン自身、ベンゲル、そしてゼムラーの業績以降は、その立場が逆転していた。ヨハン・ヤコブ・ライスケは次のように書いていた。「われわれは、新約聖書と劣らない細心さをもって、世俗の著作家たちを取り扱わなければならない。われわれが新約聖書の諸写本を吟味するのと同じ理由によって、デモステネスや他の、いかなる古い著作家だろうと、彼らの写本を精査し、それらの読みを探し出し、そして刊行するのがふさわしい。というのは、これが、信頼が確認された多くの古い諸写本の一一致をもとに、聖なるものであろうと世俗のものであろうと、テキストの歴史的真相を証明する唯一の方法だからである」⁸⁰。

実際、ライスケはアテナイの雄弁家たちと、リバニオスのようなアテナイ人たちのテキストに貢献したが、それは写本の伝統への探究よりも、むしろ彼の素晴らしい推測によるものだった(彼の多くの推測は、彼には知られていなかった写本によって、ようやく後に確認された⁸¹)。しかし、諸写本の気ままな校合にとどまる代わりに、それらをテキストの〈恒久的な〉基礎に置こうとする要求は、すぐのちに、エルネスティのタキトゥスへの序文において、また再びフリードリヒ・アウグスト・ヴォルフの『ホメロスへのプロレゴメナ』の最初の箇所において、きわめて明確に言明された⁸²。二人とも、受容テキストによって満足できない箇所でのみ諸写本を参照するという古い方法に従うことは、テキストの中に、数多くの小さな毀損と、善かれ悪しかれ、意味をもつがゆえに疑念を呼び起こさない「より容易な読み」を残すことに帰着することを正しく認識していた。

ヴォルフはこう述べている。「この浅薄で、いわば散漫な類のものから、正しい、恒常的な、確実な規律の技法に基づいた校合は明確に区別される。前者においては、われわれは、際立った、あるいはある写本において現れるもの以外は、その傷を治療しようとはしない。われわれは、意味の点では正しい、受容されうるものを見過ごすし、また権威の点で最悪のものについても同様である。一方、正しい校合は、あらゆる有益な道

⁸⁰ Reiske 1770: lxxvi.

⁸¹ しながら、ディーター・イルマーが私に指摘したように、ライスケにはデモステネスの写本の伝統において、写本A (アウグスト、現在はミュンヘン 485) の価値を最初に認識し、それを利用したという功績がある。この写本について、ヒエロニムス・ヴォルフはすでに、彼自身のデモステネスの刊本(H. Wolf 1572)において、シモン・ファブリキウスから伝えられた読みを引いているが、しかしそれらをテキストの中に導入してはなかった (Voemel 1857: 183, 193-94を参照。私はこの著作についてもイルマーの情報に負っている)。

⁸² Ernesti 1801 (1772): vi. F. A. Wolf 1985 (1795): 43-55. ヴォルフは明らかに、エルネスティからの影響に加えて、おそらくゼムラーの影響を受けている。ヴォルフとゼムラーの親密な友情については Koerte 1833: 1.252を参照(このことについて私はコンラート・ミュラーから示唆された。彼から私はまた、ヴォルフが、彼のホメロスの校訂版 [F.A. Wolf 1804; 1 = F.W. Wolf 1869: 1.252])において、伝達された読みの外的および内的蓋然性の様々な段階に関して、「聖なる批判主義の卓越された確立者」グリースバハに言及していることを指摘された。

具の援助が得られるならば、いたるところに、著者の真の手を探し出す。それは疑わしいものだけではなく、あらゆる読みの証拠を順序だてて吟味する。そして、きわめて重大な根拠のある場合に限って、すべてが同意している読みを変更する。証言の支持によって認められた限りにおいて、それ自体として、著者にとってきわめてふさわしく、形態の点で正確で優雅な、他の読みを最良のものとして受け入れる。それゆえ、証拠によって強いられ、優雅な読みを、あまり優雅ではない読みに変えるのは稀なことではない。包帯を取って傷をあらわにする。最後に、明白な疾病だけではなく、また隠された疾病をも治療する⁸³。類似した手順だけが、単純な「点検」(recognitio)ではなく「校合」(recensio)の名に値する(F. A. Wolf 1985 [1795]: 45)。体系的な「校合」ののちにはじめて、推測的な「校訂」へと移行することができるだろう。しかし「校訂」についてヴォルフはあまり共感を抱いていなかった⁸⁴。こうして、「写本に基づく校訂」の古い概念は完全に乗り越えられていた。

他方では、体系的な校合と流布版の拒否の必要性は、ヴォルフにおいて、もっとも古い写本へのあまりに排他的な信頼を伴ってはいない。この「より新しい写本が必ずしも劣っているわけではない」(recentiores, non deteriores)という主張は、われわれが知っているように、それ自体としては新しいものではなく、とりわけゼムラーから積極的な影響を受けたものだった⁸⁵。しかし、ヴォルフの形成について語る労を執るべきだろう(F. A. Wolf 1985 [1795]: 46)。「諸写本の新しさは、欠陥というよりも人間の若さである。

83 F. A. Wolf 1985 (1795): 43-44. また、ヴォルフによる、プラトン『饗宴』の校訂版への序文を参照(F. A. Wolf 1782: v-vi = F. A. Wolf 1869: 1.135-36)。「しかし、このことは、もし初版や古い版が、個々の曖昧な、あるいは明らかに誤っている章句のためにだけ時おり調べられ、比較されるのであれば、起こりえない」。しかしすでにエルネスティ(Ernesti 1801 [1772]: vi)は次のように述べていた。「先立つ時代においては、古代の作家を校訂しようとした人々は、気に掛かる箇所において写本と刊本を参照することで満足していた。……それゆえ彼らは、同じ写本と刊本から訂正することができた多くのものを、手つかずのままに放置するままで終わった。ウルガタ聖書の読みのあらゆる誤りを自分の力によって見いだするほど慧眼を持ち主はいなかったし、誤りのあるものを正しいものとして是認することも時おり生じた」。しかしながらエルネスティにおいては、これらの的確な理論的言明が実際に適用されているのを見いだすことはほとんどできない。タキトウスの校訂版にせよ、より良いキケロの校訂版にせよ、キケロに関してズンプト(C. G. Zumpt 1831: 1.xxiv-xxviii)が正しく指摘しているように、実質的には、諸写本ではなく、先行する諸刊本に基づいている。この観点からより良いのはカリマコスの校訂版(Ernesti 1761)であり、その序文において(fol. 5b)エルネスティは、『讃歌』のすべての介在するものがない写本は、失われた唯一の祖型に由来することを、それらの一致した「脱落と読み」に依拠して確証している(Pfeiffer 1949-53: 2.lvを参照)。

84 「楽しい気晴らし」とヴォルフは、『プロレゴメナ』の冒頭で「校訂」のことを呼んでいる(F. A. Wolf 1985 [1795]: 45. 44および参照)。しかしながらヴォルフは、無批判的な保守主義者ではなかった。彼はペントリー(上述、本稿127ページ)の有名な章句を反響させながら、「才知」(ingenium)を「羊皮紙の宝蔵」(membranacei thesauri)に先行させることを認めている。しかし彼は、校訂を校合に優先すべきでなく、ましてや、それにとって代わらせるべきではないと主張している。そして、エルネスティのように、「隠された誤謬」(上述)を治療するための校訂の重要性を強調している。とはいっても、ヴォルフが『プロレゴメナ』において一般的に語っているとき、彼がとくに念頭に置いているのは、推測的批判を必要としない古典古代のきわめて少ないテキストの一つである、ホメロスのテキスト(差し込まれたテキストという問題を除く)であったことに留意しなければならない。彼はのちに、校訂についてより好意的な判断を下している(F. A. Wolf 1807: 40 = F. A. Wolf: 1869: 2.832)。

85 ヴォルフとゼムラーとの関係については、上述、本稿141ページおよび註82を見よ。

年齢が必ずしも知恵をもたらすのではない。古く、良い権威に正しく従っている者は、その証言も良いものである。もし、ある写本の「最近の年代」と人間の青年期と類比が、優美な機知以上のものでないにしても、最後の一句は、原理的に、「より新しいもの」が「より劣っているもの」ではけっしてないことを巧みに説明している。最近の写字生は、古く良い写本を「良く」（そしてヴォルフは強調しているように見えるが、直接的に）写すことができたのである⁸⁶。エルネスティはベンゲルよりもはるかに巧妙に、同じ祖先に由来する多くの写本は、一つのものとしての価値を有するという原理を明らかにした⁸⁷。

クリスティアン・ゴットロープ・ハイネとアルザス人ジャン・シュヴァイクホイザーは、それぞれティブルスとエピクテトスの『提要』の諸写本の系譜を再構成することを試みた⁸⁸。たしかに、これらの試みはまったく不完全なものに終わったが、それは、写本資料への経験の浅さと不完全な知識のためばかりではなく、またとりわけ、現在においてもまだ、きわめて多くの場合に、諸写本の系図（*stemma codicum*）を辿ることが不可能にする客観的な理由、すなわち混成のゆえである。この混成という現象について、

⁸⁶ Kantrowicz 1921: 2122; Pasquali 1952a (1934): 46 を参照。彼らの議論はヴォルフよりも明瞭で十全に定式化されているが、実質的には、ヴォルフのそれと異なっているわけではない。

⁸⁷ Ernesti 1801 (1772): xxviii. 「諸写本が問題となると、われわれは数の上で多くのものを所有しているということではなく、いわば見解を述べるべき権利がある多くのものを所有している、ということに留意しなければならない。……というのは、もしあなたが同じ書物の百の写本を所有しているならば、それは一つの原型に由来することは明らかであり、それゆえ、それらのすべては一つの書物の権利と権能しか有していない」。グリースバハ（Griesbach 1796 [1774]: i.lxxi）は、きわめて類似した言葉でこの概念を表現している。しかし、イタリアは、文献学的にはまったく「停滞した」（*depresso*）環境にあったのだが（それでもヴェローナは例外的な存在だった）、ドメニコ・ヴァッラルシはすでに、聖ヒエロニムスの彼の校訂版の序文において、この原理を表明していた（Vallarsi 1766 [1734], rist. In Migne 1845: p.xxxix, para. 35）。すなわち、誤謬あるいは恣意的改変 [*criticorum ausis*] において一致する諸写本は、「一つ以上のもの」に値しない。ここで理解すべきは、批判家たちの恣意性ということに関して、ヴァッラルシは、誤って、混成の可能性を見過ごしていたということである。そして、とりわけ18世紀の、まさにヴェローナにおいて、ダンテのテキスト批判は、バルトロメオ・ペラッツィーニというヨーロッパ的才知の文献学者を得た（『ダンテの「神曲」の訂正と註釈」Perazzini 1775）。彼についてはフォレーナ（Folena 1965: 67-69）がわれわれの関心を引いたばかりである。ペラッツィーニは、（おそらくヴァッラルシの影響によって）上述した系譜的原理を繰り返すにとどまらず、彼の同時代の、あるいは少し以前の新約聖書文献学者の流布版と多くは共通していた、流布版の擁護者たちに対して激烈な論争をしかけた。この類似性は、『神曲』が新約聖書には及ばないとしても、宗教的および芸術的要因の複雑な関与によって、「聖なるテキスト」と考えられていた、という事実によって高められていた。ペラッツィーニは「聖なるテキストの予断」について明確に語り（Prazzini 1775: 56）、こう繰り返している。「もし最初に完全に校訂されていなかったならば、いかなるテキストも〈聖なるものではない〉。加えて、「それゆえ、私は革新者と言われるべきではなく、そうと言われるべきはかつて受容されていたテキストを改変した者である [すなわち、この場合には、新約聖書の受容テキストという意味ではなく、伝統のより古い基層、後述するような「古代の読み」*antiqua lectio*] という意味である」。

⁸⁸ Heyne 1871 (1755): xiii-lxxviii. しかしながら、ハイネの系譜は第一に、ティブルスの〈諸刊本〉の系譜であり、諸写本の系譜は副次的なものだった。Schweighauser 1798: pref. シュヴァイクホイザーは諸写本を分類するために、共通の毀損よりも、エピクテトスの『提要』のテキストとシンプリキオスによるそれへの註釈のテキストの相互的配置に信を置いていた（Timpanaro 1955: 70 を参照）。シュヴァイクホイザーのより大きな功績は、「派生的写本の除外」（*eliminatio codicum descriptorum*）に存する。以下、原著 69 ページを見よ。

ハイネ——テキスト批判においてはたしかに独創性に富んでいたわけではないが、テキストの批判家としては、一般に言われているよりも重要である文献学者⁸⁹——はしっかりと理解していた。新約聖書についてはグリースバハが理解していた⁹⁰。

またホメロスの写本の伝統は、あまりに混成されていたために、ヴォルフの「クラスとファミリーによって」順序づけるという企てが実現しえたほどである⁹¹。しかしヴォルフは、『プロレゴメナ』の中で、ヴィヨワゾンが発見したヴェネツィアの註釈を利用できたおかげで、ある別の事柄を、すなわち、古代のテキストの歴史を実現することができた⁹²。このようにして、ヴォルフはラハマンへの道ではなく、むしろヤーンとヴィラモヴィツの「テキスト史」(Textgeschichte) という概念と、19世紀と20世紀に——パスクアーリのある章のタイトルを繰り返すならば——「古代の諸ヴァリエントと古代の諸版」についてなされたすべての研究への道を準備した。ヴォルフにとっては、ホメロスのこの問題は、『イリアス』と『オデュッセウス』におけるテキストの歴史の最初の口承的で民衆的な局面でしかなかった。すなわち、『プロレゴメナ』においては、歴史的=文学的問題自体としてではなく、このような問題として扱われたのである⁹³。

89 Heyne 1817 (1755): xv, xxxvi. ここでハイネは「おそらく他のものとともに準備され、あるいはそれらから作成されて原型」について語っている。テキストの批判家としての、そして一般に文献学者としてのハイネの名声は、彼の弟子であるヴォルフとラハマン（そしてあまり技術的ではない領域においてフリードリヒ・シュレーゲル）が彼に向かってとった軽蔑的な調子によって損なわれている。ラハマンについてはとりわけ Lachmann 1876: 2.106 を見よ。

90 Griesbach 1796 (1774): lxxviii. 「ある校合の読みが別のファミリーの写本に導入される」。ゼムラーはすでに (Semler, 1765)、異なる章句に応じて、まさに同一の写本が異なる「校合」に服していることをしばしば指摘していた (Semler [1765])。

91 F. A. Wolf 1985 (1795): 44. ヴォルフは、ある場合には、系譜的方法の適用を許すことができるだろう他の著作家たち (プラトン、キケロなど) の校訂版においては、自らの原理とは対照的に、性急な「点検」(recognitions) に留まった。

92 すでにリシャル・シモンは『新約聖書のテキストの批判的歴史』(Simon 1689)において「テキストの歴史」という概念に到達していたが、古典文献学者たちの中で、彼に続く者はいなかった。現在では Pfeiffer 1976: 130 を参照。

93 この点について、拙稿『19世紀文化の諸局面と諸様相』(Timpanaro 1980: 125 e n.28) を参照。

[引用文献]

- Bengel 1725: *Johanni Chrysostomi De sacerdotio libri sex*, ed. J. A. Bengel. Stuttgart, 1725.
- Bengel 1763a (1734): J. A. Bengel, *Apparatus criticus ad Novum Testamentum*. Tübingen, 1763.
- Bengel 1763b (1742): J. A. Bengel, *Gnomon Novi Testamenti*. Ulm, 1763 (1st ed. Stuttgart, 1742).
- Bentley 1711: R. Bentley, ed., *Q. Horatius Flaccus*, 2 vols. Cambridge, 1711.
- Bentley 1713: R. Bentley, *Remarks upon a Late Discourse of Free-Thinking*. London 1713 (= Bentley 1836-38: 3.287-368)
- Bentley 1721: R. Bentley, *Proposals of Printing a New Edition of the Greek Testament*. London, 1721 (= Bentley 1836-38: 3.477-86)
- Bernays 1855: J. Bernays, *J. J. Scaliger*. Berlin, 1855.
- Bertheau 1908: C. Bertheau, "Wettstein, Johann Jakob, gest. 1754," *Realencyklopädie für protestantische Theologie und Kirche*, 3rd ed., (1908), 21.198-203.
- Blok 1949: F. F. Blok, *N. Hensius in Deinst van Christiana van Zweden*. Delft, 1949.
- Branca 1973: V. Branca, "Mercanti e librai fra Italia e Ungheria," in *Venezia e Ungheria nel Rinascimento*, ed. V. Branca, 335-52. Firenze, 1973.
- Brink 1978: C. O. Brink, "Studi classici e critica testuale in Inghilterra," *Annali della Scuola normale superiore di Pisa*, ser. 3, 8, no.3 (1978): 1071-1228.
- Bröcker 1885: L. O. Bröcker, "Die Methoden Galens in der literarischen Kritik," *Rheinisches Museum* 40 (1885): 415-38.
- Caprioli 1969: S. Caprioli, *Indagini sul Bolognini: Giurisprudenza e filologia nel Quattrocento Italiano*. Roma, 1969.
- Carlini 1967: A. Carlini, "L'attività filologica di F. Robertello," *Atti Accad. di Udine*, ser. 7, 7 (1967): 53-84.
- Casamassima 1964: E. Casamassima, "Per una storia delle dottrine paleografiche dall'Umanesimo a Jean Mabillon," *Studi Medievali*, ser. 3, 5 (1964): 525-78.
- Contini 1955: G. Contini, "Note sui rapporti fra localizzazione dei MSS e 'recensio,'" in *Studi e problemi di critica testuale*, 85-92. Bologna, 1961.
- Dain 1975 (1949): A. Dain, *Les manuscrits*, 3rd ed. Paris, 1919 (1st ed. Paris, 1949).
- Di Benedetto 1965: V. Di Benedetto, *La tradizione manoscritta euripidea*. Padova, 1965.
- Dindorf 1876: W. Dindorf, *Lexicon Aeschyleum*. Leipzig, 1867.
- Ellis 1862: A. A. Ellis, *Bentleii critica sacra*. Cambridge, 1862.
- Elmsley 1810: P. Elmsley, Review of C. J. Blomfield, ed. *Aeschyli Prometheus Vincetus* (Cambridge, 1810), *Edinburgh Review* 33 (1810): 211-42.
- Erasmus 1538 (1500): Erasmus, *Adagiorum Chiliades*. Basel, 1538 (1st ed. Paris, 1500).
- Ernesti 1761: *Callimachi hymnos, epigrammata et fragmenta cum notis variorum*, ed. J. A. Ernesti. Leiden, 1761.
- Ernesti 1801 (1772): *Taciti opera*, vol.1, ed. J. A. Ernesti, rev. J. J. Obelin. Leipzig, 1801 (1st

- ed. Leipzig, 1772).
- Folena 1965: G. Folena, "La tradizione delle opere di Dante Alighieri," in *Atti del Congresso internazionale di studi danteschi*, 1.1-78. Firenze, 1965.
- Frankel 1950: E. Frankel, *Aeschylus Agamemnon*. Oxford, 1950.
- Giarratano 1951: C. Giarratano, "La critica del testo," in *Introduzione alla filologia calssica*, 73-132. Milano, 1951.
- Goold 1963: G. P. Goold, "Richard Bentley: A Tercentary Commemoration," *Harvard Studies in Classical Philology* 67 (1963): 285-302.
- Grafton 1975: A. T. Grafton, "J. Scaliger's Edition of Catullus (1577) and the Traditions of Textual Criticism in the Renaissance," *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes* 38 (1975): 155-81.
- Grafton 1977a: A. T. Grafton, "On the Scholarship of Politian and Its Context," *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes* 40 (1977): 150-88.
- Grafton 1977b: A. T. Grafton, "From Politian to Pasquali," *Journal of the Roman Studies* 67 (1977): 171-76.
- Gregory 1900-1909: C. R. Gregory, *Textkritik des Neuen Testaments*, 3 vols. Leipzig, 1900 (vol.1), 1902 (vol.2), and 1909 (vol.3)
- Griesbach 1796 (1774): *Novum Testamentum Graece*, 2 vols., 2nd ed., ed. J. J. Griesbach. Halle 1796 (1st ed., Halle, 1774).
- Haupt 1875-76: M. Haupt, *Opuscula*, 3 voll. Leipzig, 1875-76.
- Heinsius 1661: N. Heinsius, ed., *Publii Ovidii Nasonis opera omnia*. Amsterdam, 1661.
- Hemmerdinger 1977: B. Hemmerdinger, "Philologues de jadis (Bentley, Wolf, Boeckh, Cobet)," *Belfagor* 32 (1977): 485-522.
- Hertz 1851: M. Hertz, *Karl Lachmann: Ein Biographie*. Berlin, 1851.
- Heyne 1817 (1755): C. G. Heyne, ed., *Tibulli carmina*, 4 ed., rev. C. F. Wunderlich, vol. 1. Leipzig, 1817 (1st ed. Leipzig, 1755).
- Housman 1927 (1926): M. Annaei Lucani: *De bello civili*, ed. A. E. Housman. Oxford, 1927 (1st ed. Oxford, 1926).
- Housman 1937 (1903): *M. Manilii Astronomicum*, Book 1, 2 ed., ed. A. E. Housman. Cambridge, 1937 (1st ed. Cambridge, 1903).
- Jebb 1889: R. C. Jebb, *Bentley*. London, 1889.
- Jebb 1900 (1886): R. C. Jebb, Sophocles: *The Plays*: vol. 2, *The Oedipus Coloneus*, 3rd ed. Cambridge, 1900 (1st ed. Cambridge, 1886).
- Kantrowicz 1921: H. Kantorowicz, *Einführung in die Textkritik*. Leipzig, 1921.
- Kenny 1974: E. J. Kenny, *The Classical Text: Aspects of Editing in the Age of the Printed Book*. Berkeley, Los Angeles, and London, 1974.
- Kenney 1980: E. J. Kenney, "A Rejoinder," *Giornale italiana di filologia*, 32 (1980): 321-23.
- Kirner 1901: G. Kirner, "Contributo alla critica del testo delle Epistolae ad Familiares di Cicerone," *Studi italiani di filologia classica* 9 (1901): 369-433.

- Koerte 1833: W. Koerte, *Leben und Studien F. A. Wolfs*. Essen, 1833.
- Lachman 1830: K. Lachman, "Rechenschaft über Lachmans Ausgabe des Neuen Testaments," *Theologische Studien und Kritiken* 3, no. 2 (1830): 817-45 (= Lachmann 1876: 2. 250-72).
- Lachmann 1876: K. Lachmann, *Kleinere Schriften*, 2 voll. Berlin, 1876.
- Le Clerc 1730 (1697): J. Le Clerc, *Ars critica*, 5 ed. Amsterdam, 1730 (1st ed. Amsterdam, 1697).
- Lehrs 1882: K. Lehrs, *De Aristorachi studiis Homericis*. Leipzig, 1882.
- Leutsch 1851: *Corpus Paroemiographorum Graecorum*, vol. 2, ed. E. L. Leutsch. Göttingen, 1851 (rpt. Hildesheim, 1965).
- Ludwich, 1885: A. Ludwich, *Aristarchs Homerische Textkritik*, vol. 2. Leipzig, 1885.
- [Mace] 1729: [D. Mace], ed., *The New Testament in Greek and English*. London, 1729.
- Mälzer 1970: G. Mälzer, *J. A. Bengel: Leben und Werk*. Stuttgart, 1970.
- McLachlan 1938-39: H. McLachlan, "An Almost Forgotten Pioneer in New Testament Criticism," *Hibbert Journal* 37, no.4 (1938-39): 617-25.
- Metzger 1968 (1964) : B. M. Metzger, *The Text of the New Testament : Its Transmission, Corruption, and Restoration*, 2nd ed. Oxford, 1968 (1st ed. Oxford, 1964)
- Morel 1766: J. B. Morel, *Eléments de critique*. Paris, 1766.
- L. Müller 1869: L. Müller, *Geschichte der klassischen Philologie in den Niederlanden*. Leipzig, 1869.
- Munari 1950: F. Munari, "Codici heinsiani degli Amores," *Studi italiani di filologia classica*, n.s., 24 (1950): 161-65.
- Nestle 1893: E. Nestle, "Bengel als Gelehrter: Ein Bilf für unsere Tage," In *Marginalien und Materialien*, 2.1-143. Tübingen, 1893.
- Nolte 1913: F. Nolte, *J. A. Bengel*. Gütersloh, 1903.
- Pascal 1918: C. Pascal, "Emendare," *Athenaeum* 6 (1918): 209-16.
- Pasquali, 1942: G. Pasquali, *Terze pagine stravaganti*. Firenze, 1942.
- Pasquali 1952a (1934): G. Pasquali, *Storia della tradizione e critica del testo*. Firenze, 1952 (1a ed. Firenze, 1934).
- Perazzini 1775: B. Perazzini, "Correctiones et adnotationes in Dantis Comoediam," in *In editionem tractatum vel sermonum S. Zenonis*, 55-86. Verona, 1775.
- Peri 1967: V. Peri, "Nicola Maniacutia: Un testimone della filologia romana del XII secolo," *Aevum* 41 (1967): 67-90.
- Perosa 1955: A. Perosa, *Mostra del Poliziano nella Bibliotheca Medicea Laurenziana*. Firenze, 1955.
- Pettimengin 1966: P. Pettimengin, "À propos de éditions patristiques de la Contre-Réforme," *Recherches Augustiniennes* 4 (1966) : 199-251.
- Pfeiffer 1949-53: *Callimachus*, 2 vols., ed. R. Pfeiffer. Oxford, 1949-53.
- Pfeiffer 1968: R. Pfeiffer, *History of Classical Scholarship from the Beginning to the End of the Hellenistic Age*. Oxford, 1968.

- Pfeiffer 1976: R. Pfeiffer, *History of Classical Scholarship from 1300 to 1850*. Oxford, 1976.
- Poliziano 1972: A. Poliziano, *Miscellaneorum centuria secunda*, ed. V. Branca e M. Pastore Stocchi. Firenze, 1972.
- Poliziano 1978: A. Poliziano, *Commento alle Silve di Stazio*, ed. L. Cesarini Martinelli. Firenze, 1978.
- Pontedera 1740: J. Pontedera, *Antiquitatum Latinarum Graecarumque enarrationes atque emendationes*. Padova, 1740.
- Quantin 1846: M. Quantin, *Dictionnaire raisonné de diplomatique chrétienne*. Paris, 1846.
- Quentin 1926: H. Quentin, *Essais de critique textuelle*. Paris, 1926.
- Reeve 1974: M. D. Reeve, "Heinsius's Manuscripts of Ovid," *Rheinisches Museum* 117 (1974): 133-66.
- Reiske 1770: J. J. Reiske, ed., *Oratorum Graecorum ... quae supersunt*, vol.1. Leipzig, 1770.
- Reynolds-Wilson 1991 (1968): L. D. Reynolds and N. G. Wilson, *Scribes and Scholars*. Oxford, 1991 (1st ed. Oxford, 1968)
- Rizzo 1973: S. Rizzo, *Il lessico filologico degli umanisti*. Roma, 1973.
- Robortello 1557: F. Robertello, *De arte sive ratione corrigendi antiquos libros disputatio*. Padova, 1557.
- Ruhnken 1975 (1789): D. Ruhnken, *Elogium Tiberii Hemsterbusii*, ed. J. Frey. Leipzig, 1875 (1st ed., 1789)
- Sabbadini 1920: R. Sabbadini, *Il metodo degli umanisti*. Firenze, 1920.
- Savile 1612: *Johannes Chrysostomi Opera*, ed. H. Savile, vol.8. Eton, 1612.
- Scaliger 1582 (1577): *Iosephi Scaligeri Catulli Tibulli Propertii nova editio cum castigationibus in Catullum, Tibullum, Propertium*. Antwerpen, 1582 (1a ed. Paris, 1577).
- Scagliger 1600 (1579): J.J. Scagliger, ed., *M. Manilii Astronomicum Libri quinque*. Leiden, 1600 (1st ed. Strasburg, 1579)
- Scaliger 1627: *Ioseph Scaligeri Epistolae*. Leiden, 1627.
- Schweighauser 1798: J. Schweighauser, ed., *Athenaei Naucraticae Deipnosophistarum libri quindecim*. Strasuburg, 1801-7.
- Semler 1765: J. S. Semler, *Hermeneutische Vorberitung*, vol.3, pt.1. Halle, 1765.
- Shackleton Bailey 1963: D. R. Shackleton Bailey, "Bentley and Horace," *Proceedings of the Leeds Philosophical Society* 10, no.3 (1963): 105-15.
- Simon 1689: R. Simon, *Histoire critique du texte du Nouveau Testament*. Rotterdam, 1689.
- Timpanaro 1955: S. Timpanaro, Recensione di *Niccolo Perotti's Version of the Enchiridion of Epictetus*, ed. R. P. Oliver (Urbana 1954), *La Parola del Passato* 10 (1955): 67-70.
- Timapanaro 1971: S. Timpanaro, *Die Entstehung der Lachmannschen Methode*. Hamburg, 1971.
- Timpanaro 1976: *Il lapsus freudiano: Psicanalisi e critica del testo*. Torino, 1974. [*The Freudian Slip: Psychoanalysis and Textual Criticism*, trans. By K. Soper. London, 1976.]
- Troje 1971: H. E. Troje, *Graeca leguntur*. Köln und Wien, 1971.
- Vallarsi 1766 (1734): *Sancti Eusebii Hieronymi Opera*, 11 vols., ed. D. Vallarsi. Verona, 1776

- (1st ed., 1734)
- Venturi 1959: F. Venturi, “Controbuti ad un dizionario storico 1: Was ist Aufklärung? Sapere aude,” *Rivista storica italiana* 71 (1959): 119-28.
- Vettori 1540: *Petri Victorii Explicationes suarum in Ciceronem castigationum*. Leiden, 1540.
- Vettori 1571: *Ciceronis Epistulae ad Atticum*, ed. P. Victorius. Firenze, 1571.
- Vettori 1586 (1558): *Ciceronis Epistulae ad Framiliares*, ed. P. Victorius. Firenze, 1586 (1st ed., Firenze, 1558).
- Vitelli 1962: G. Vitelli, *Filologia classica … e romantica*, ed. T. Lodi, Con una prefazione di U. E. Paoli. Firenze, 1962.
- Voemel 1857: J. T. Voemel, ed., *Demosthenis Contines*. Halle, 1857.
- Waszink 1979: J. H. Waszink, *Opuscula selecta*. Leiden, 1979.
- Wettstein 1730: J. J. Wettstein, *Prolegomena ad Novi Testamenti Graeci editionem accuratissimam*. Amsterdam, 1730.
- Wettstein 1734: J. J. Wettstein, revue of J. A. Bengé., ed. *Novum Testamentum Graecum* (Tübingen, 1734), *Bibliothèque Raisonnée des Ouvrages des Savans de l’Europe* 13, no.1 (1734) : 203-28.
- Wettstein 1751-52: *Novum Testamentum Graecum*, ed. J. J. Wettstein, 2 vols., Amsterdam, 1751-52.
- Wetzer-Welte 1882-1903: *Kirchenlexicon*, 13 vols., 2nd ed., ed. H. J. Wetzer und B. Welte. Freiburg, 1882-1903.
- Wilamowitz 1914: U. von Wilamowitz – Moellendorff, ed., *Aeschyli Tragoeditae*. Berlin, 1914.
- Wilamowitz 1982 (1921): U. von Wilamowitz-Moellendorff, *History of Classical Scholarship*, Trans. from German by A. Harris, ed. With an Introduction and Notes by H. Lloyd-Jones. London, 1982 (= *Geschichte der Philologie*, Leipzig und Berlin, 1921; rev. ed., 1927).
- F.A. Wolf 1804: *Homeri et Homeridarum opera et reliquae*, vol.1, ed. F. A. Wolf. Leipzig, 1804.
- F. A. Wolf 1807: F. A. Wolf, “Vorrede zu Platons Gastmahl,” Praefatio ad *Platonis Symposium*, ed. F. A. Woff. Ilfeld, 1782 (= Wolf 1869: 1.130-57).
- F. W. Wolf 1869: F. A. Wolf, *Kleine Schriften*, 2 vols. Halle, 1869.
- F. A. Wolf 1985 (1795): F. A. Wolf, *Prolegomena to Homer*, trans. with an Introducton and Notes by A. Garafon, G. W. Most, and J. E. G. Zetzel. Princeton, 1985 (= *Prolegomena ad Homerum*, Halle, 1795).
- H. Wolf 1572: H. Wolf, ed., *Demosthenes opera*. Basel, 1572.
- C. G. Zumpt 1831: *Verrinarum libri septem*, 2 vols., ed. C. G. Zumpt. Berlin, 1831.